
開拓者～神の力を持つ者たち～

ストラウド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

開拓者〜神の力を持つ者たち〜

【Nコード】

N6631H

【作者名】

ストラウド

【あらすじ】

太陽系が消滅し、地球が幻の星と言われるまでになった未来。人々は相変わらず戦争を続けている。そんな人々に神は新たな人を与えた。世界を一つにし、戦争のない世界を生み出すために。これは世界を1つにする者と世界を零にする者の戦いである。この世界はすべて神が操っているはずだった。

プロローグ（１）

宇宙という世界の中で文明は誕生、そして滅亡を繰り返しながらも生き続けている。

この宇宙で初めてとなる文明は、自然との調和を一番とする考えを持っており科学力は乏しかった。そのためか、他の宇宙から飛来したとも言われる高知能生物との侵略防衛戦争に敗退し滅亡する。

のちの文明は、前にも文明と呼ぶことができる文化があったという証拠を見つけた。そしてその文明を第一次文明と名づけ、自分たちの文明を第二次文明とした。

第二次文明は、第一次文明の調査をする事で技術革新を謀った。

それによって滅亡することも知らずに。

調査する中で彼らは知ってしまった。他の宇宙が存在し、他の生物がいることを。

その調査内容はすぐに広がり、世界は困惑し始めた。そしてついに困惑は次第に戦争へと変わり、同盟国どうしの連続した内戦により第二次文明は滅亡する。

そして、時は流れ第三次文明、それは最も長く、最も技術を持ち、最も理想とされる文化を築き上げた。

しかし、技術力は第三次文明に災厄をもたらした。星を一撃で破壊する砲、時空を歪ませるほどのエネルギーの使用、それらの技術は惜しみなく戦争に利用された。斯くして、第三次文明は滅亡した。最後に第三次文明は後世に同じ過ちをさせないため、星を作りその星に自分たちの歴史を残しこの世から消えていった。

その後ついに人々が「世紀」と呼ぶ時代、第四次文明が誕生した。人間は20世紀の間に2度も地球をまきこむ戦争を行った。第二次世界大戦後、ある国である実験が行われていた。その実験は人間を超える人間、「強化人間」を作るためものだった。

しかしその国の有権者が変わったことで国は乱れ、ついには内戦となり滅亡してしまった。だがその国は100年、200年後もずっと世界の人々に存在さえ知られることはなかった。

なぜなら、そこは、第三次文明の歴史と技術が隠されており守られていたからである。

30世紀地球規模の大地震による大陸大移動が起こった。それによつて隠され続けてきたその国は世界の前に姿を表わしてしまう。

ブログ（1）（後書き）

初めての投稿です。更新は遅めになると思います。どんなことでも良いです感想待ってます

プロローグ（２）

人々はそこに１００人ほどの研究者を送る。そして「強化人間」制作の実験が行われていたことを知り、また数多くの新しい技術も獲得した。

その中の一つにメモリーボックスと思われる物があつた。研究者たちは始め技術に関する物だと考えていたが、その物の内容は、酷く辛い物だった。

無惨にも崩れゆく天に向かってそびえ立っていた超高層建築物。その瓦礫に為すすべもなく呑み込まれる人々。おびただしいほどの血飛沫。絶え間なく聞こえる悲痛な叫び声。一瞬で焼け野原と化する大地。

それは、言葉が通じなくとも伝わるメッセージだった。

技術が最終的にたどり着くところとは、災厄であるということ。

研究者たちは迷わず各国の首相にあの映像を公表した。事態を重く見た首相たちは、すぐに研究者を撤収させる。

しかし、発見当時から開発が進められていた「強化人間」作製は成功しており、すでに１００人を越えていた。

完成した「強化人間」と普通の人間を比較すると、身体能力だけの向上ではなく全てにおいて向上が確認された。実験用マウスにおいての強化人間化の結果より、寿命が倍以上延びることが判明。また、脳においても向上していた。さらに、強化人間の特徴といえる高次元空間想像能力があると分かった。

始め「強化人間」について研究者たちは、軍用に作られた人間だと考えていた。しかし寿命の長さや身体的、精神的成長の遅さから判断し「強化人間」は新人類作製と考えなおされた。

そんな「強化人間」に首相たちはすべて無かったことにし、自由を与える。他の技術は環境問題によって衰退していた社会を復興させるもの意外は破棄。そして5世紀に渡って調査されたその島は、再び長い眠りにつくことになった。

「強化人間」それは、時が過ぎることに忘れ去られ伝説のものとなりやがて「未来人」と呼ばれるようになった……。

第1章：夜明け

共和国領バルンジ銀河団所属オルク銀河百十六区第七惑星クーロイス。

4度目となる共和国と帝国の戦争中、帝国軍の無差別爆撃によって壊滅。終戦後、再建のため支援金が共和国から提供される。

しかし、その額は十分な量でなくやがてクーロイスはオルク銀河一の貧困国となる。

日が暮れクーロイスを深い闇が包み込む。そして、クーロイスは満天の星空の光りと首都セレンピアスの微かな光りのみとなる。

街灯が一つもなく、あたり一面廃墟と化した大通りを会社帰りの女性が一人歩いている。その女性が歩く道の両脇には、薄汚れた服を着た者が数人、彼女に物乞いをしている。

他にも、じっと見つめてくる者がぼつぼつと崩れかけた超高層ビルから現れる。いつものように彼女は、うつむいて軽くそれを受け流しそそくさと歩く。

セレンピアスまで後1キロぐらいの所で彼女は珍しい光景を目にしたため、その方へ歩み寄った。

「僕、どうしたの？」

彼女は座り込んでじっとしている小学生くらいの男の子に、優しく声をかける。たいてい戦災孤児は同グループの中に入り、今ごろなら夕食をとっているはずなのだが、その男の子の周りには人っ子一人いない。

彼女はそんな男の子の前に、しゃがみ込み再び声をかける。

「お友達はどこにいるの？」

その男の子は下を向いたまま少し首を左右に振った。

「私はエリシア、イクル・エリシア。君の名前はなんて言うの？」

エリシアに続き男の子が応える。

「ストラウド・ゼロ」

「ゼロ君は一人なの？」

ゼロはゆっくりとうなずく。

「夕食は食べた。家はどこ？」

エリシアはまた質問した。

「食べてない。帰る場所……」

そう言ってゼロは口を閉じ黙り込む。

エリシアはどうしようと少し考えると、優しい声で私のうちに来ると言った。ゼロは少しの間考え込む素振りを見せた。そして顔を上げ、うんと返事をする。

「ピッピッピッ。ピッピッピッ」

時計が真つ暗な部屋に朝の訪れを告げる。数分後その音は勝手に止まり、再び闇の世界に静寂が訪れる。綺麗な茶髪の男がベットから体を起こし、眠気覚ましに頭を強く振った。

ウォールリンク（壁に窓のように取り付けられたスクリーン）が外の様子を映し出す。それによって、部屋が明るくなるとベットの近くの机に置かれた携帯端末が機械音で喋り出した。

「おはようございます。メールが一件届いています。再生しますか」

男は端末にぶつきらばうに再生してくれと答えた。

「再生します。アレンだゼロ、今日は訳有って一緒に行けなくなつた。時間になったら一人で行ってくれ。……以上です」

再生された耳障りな男の声にゼロと呼ばれた男は、一緒に行っているつもりは無いのだがと思いながら、携帯端末を腕に取り付け寝室を出る。

リビングに入ると部屋にある照明、テレビ、エアコンが自動的に電源を入れ動き出した。ゼロはキッチンに行くと冷蔵庫からおもむろに冷凍食品を取り出し、調理機に入れる。

テレビを見ながら朝食をすませ、身だしなみを整える。そして軍服に着替えると、すぐさま家を出た。

ゼロはエレベーターミナルまでの長い廊下をウォールリンクが映し出した首都コーバを見ながら歩いていった。

エレベーターミナルに着くと駅がある上の階へ行くエレベーターに乗る。

百人ぐらいが裕に乗れるそれは安全を確認した後、扉を閉め動き出した。

駅のある階に着くと、大勢の人が一齐にエレベーターから降りる。その人の波に飲み込まれるようにゼロも降りた。

ゼロはそのまま、改札口へ向かい腕の携帯端末を改札機にかざす。ピッという音と共にバーが開きゼロは通り抜けた。

しばらくの間ホームで列車を待っているとアナウンスが入る。

「まもなく3番乗り場にフインディー行き列車が参ります」

レールのない透明な円形の筒の中を列車が静かに走って来た。列車がホームに入ってくるとシューと空気が入ってくる音がし始めた。列車が止まり、列車のドアとその付近の筒の一部が開く。ゼロは2両目に乗った。車内には、軍服を着た者が数人見受けられる。

耳鳴りに近い高い金属音をながしながら列車は静かに動き出した。ゼロは5つ先で降り、軍の教育センターに向かって歩きだした。

第1章：夜明け（後書き）

誤字等ありましたら、報告してくれるとうれしいです。
ご意見・ご感想まっています。

第1章：夜明け？

ユーバ・共和国軍教育センター第一講義室。

講義室の一番前にある大きなスクリーンの前にさまざまな勲章を付けた男が勇ましく立っている。

その男は、席に座っているゼロたちに向かって話し始めた。

「長期にわたったテスト、合格おめでとう。私はここ、軍教育センターの総合責任者ナビク・リギユラインだ」

耳障りな囁れ声でナビクは、話しを続ける。

「晴れて君たちは、本日より共和国軍の戦闘機パイロットになる権利を得た。

これから約五年間優れた戦闘機乗りとして活躍できるようにしっかりと努力するように。

では、これで私からの話しは終わりだ。最近忙しくてな、まだ、話したいことが山ほどあるがまた今度にしよう。では、グヴェー教官、後は頼みましたよ」

ナビクが話しを終えると座っていたパイロット候補生たちは瞬時

に立ち上がる。候補生からの敬礼を受け満足したナビクは、やたらとでかい勲章をジャラジャラと高らかに鳴らしながら講義室を退出した。

それと同時に候補生たちの緊張が和らぐ、しかしすぐ候補生たちに次の波が押し寄せた。ナビクにグヴェー教官と呼ばれたスキンヘッドで厳つい顔をした男が面倒臭相に候補生に話し始めたのだ。

「チッ。……早速だが明日からのことについての話だ。明日から一週間、アシスタントとなる人材を自分たちで決め、2人1組のペアを作れ。」

アシスタントとは、貴様らのアシスト、つまり戦闘中での機体の調整や、バックアップ、情報処理を担う役だ。男と女のペアが一般的だが別に男同士、女同士でもかまわない。

一つ言っておくが、気の合わないような奴とは組んだりするなよ。おっと、単独、ペア無しに志願変更する奴は話が終わった後、この場に残るように。私からは以上。何か質問は？」

グヴェーはそう言って候補生たちに睨みを利かせる。

「よし、話は終わりだ、アシスタントが必要な奴はさっさと下がれ。俺に用がある奴は前に来い」

鋭い口調で候補生たちを動かす。候補生は息をつく間もなくそそくさと動き始めた。

取りあえず講義室を出たゼロは、試験期間中に行きつけの店となった教育センター唯一のカフェに足を向けた。

今では立派な習慣となった、コーヒーを飲みながら何か考え事をするということ。今日はいつもより、大切な時間の一つとなった。

ゼロは、長時間に渡る緊張を解し、明日からのアシスタント探しについて考えていた。

友人が多い者であれば比較的簡単に見つけることができるのであるが、ゼロには友人と呼べる者が一人としていない。

ふと、ゼロの頭にアレンが現れたが、あんな奴とはこっちから願い下げだとすぐに思い別の案を練る。しかし、すっかり冷めてしまったコーヒーを目の前に腕を組み考えても一向に良いアイデアが生まれない。ゼロは、ため息を漏らすしかなかった。

第1章：夜明け？

「あら、ゼロちゃんじゃない。どうしたのそんなに頭を抱えて」

そう言いながら現れた女性はゼロに注文されていないショートケーキを差し出した。

「ケーキなど頼んだ覚えはないのですが、それにちゃん付けは止めてください。ミングさん」

ゼロはケーキを押し返す。

「もちろんサービスよ。サービス。まあ、合格祝いだと思って食べなさい。それでさあ、何を悩んでるのよ」

「べつに大したことではありません」

ミングは手を叩き、あつ分かったと声を上げる。

「さては、ゼロちゃん恋煩い？ 大人になったわねえ。姉さん、うれしいわ」

「弟になったつもりはありませんし、第一知り合ったのも数日前で

す」

「もう、そんなことはどうでもいいの。悩み事は何に？」

「アシスタントをどうやって見つけようかと」

ゼロの応えに悩み始めたミングだったが、急に何かひらめいたかのように顔を上げた。

「あつと、いけない、お客様の御出ましましたわ。ということでゼロちゃんごめんね」

ミングはスタスタと客の下へと駆けて行ってしまった。おいおいと思いながらゼロは、合格祝いのケーキを口へ運ぶ。

ふと、カウンター席に座った二人組の若い女性に目を遣る。そのうちの一人と目が合った。気まずく感じたゼロは何となく軽く頭を下げた。するとその女性も軽く頭を下げてきた。

何になさいますか、という呼び掛けに女性は慌てて顔を声の方向へとやる。ゼロも視線をコーヒーに戻した。どこかで合った気がするのだが、と思いながらもケーキをせっせと口にする。そして、食べ終わるとコーヒーを一気に飲み、テーブルにある受信機に携帯端末を近付け、ピツという音と共に会計をすませた。

その勢いのまま、ゼロは店を出た。店の出口で何も考えずに突っ立っていたゼロだったが、アレンからお使いを頼まれていたことを

思い出し、ショッピングセンターへ足を進めた。

カフェで女性と目が合ってから、モヤモヤとした気持ちは買物ですんでも消えることなく、ゼロの頭の中を漂っている。ゼロはその気持ちに構うことなく、駅に向かい帰りの列車を待っていた。いつもならば混雑する時間帯なのに、駅のホームには数え切れるほどの人数しかいない。珍しいなあ、と辺りを見回す。ふとゼロの目にカフェで会った女性の姿が目に見え、飛び込んできた。

気がつけば、その女性に声を掛けていた。

「すみません」

その女性は振り向き、ゼロに気がつく。

「カフェでお会いした方ですね。どうかしましたか？」

女性が着ている軍服の肩にアシスタント候補生であることを示す白と黄色のラインが入っていることに、ゼロは気がつき、質問を投げかけた。

「アシスタント候補生だったのですね。パートナーは、もうお決まりですか？」

「いいえまだ、明日から探そうと思っていたので」

「もしよろしければ、私のパートナーになってくれませんか？」

「私は構いませんが、本当にいいのですか？ 今日初めてお会いしたのに」

少し戸惑いながらも、その女性はゼロのアシスタントになることを了承した。

「そう考えるのが普通ですよ。そういえば、お互いの名前も知らない者同士でしたね。ストラウド・ゼロです。よろしく」

ゼロは右手を差し出した。女性は微笑み、ゼロと握手をする。

「バイロス・シェイルです。こちらこそよろしくお願いします」

あつ、といって腕に括り付けてある端末を操作し始める。

「連絡先を教えてくださいませんか」

二人が連絡先を交換した後、列車の訪れを告げるアナウンスが入る。

「まもなく、三番ホームにルメギ行き列車がまいります。危険ですのでシールドパイプ及びホームドアには、手を触れないようお願いします」

乗車すると、空いている二人掛けの席に座った。

第1章：夜明け？

「あの。ストラウドさん」

「ゼロでいいです。シェイルさん」

「あつ、はい。ゼロさん、どうして私を選んだのですか」

「気が合いそうな人だなあ、と思ったのと直感ですかね」

その答えにシェイルは、首をかしげる。納得できないようなのでゼロは慌てて付け加えた。

「あと、以前どこかで会っていた気がしたので。……俺何言っただ」

シェイルはたまらず笑う。

「何となく聞きたくなっただけなので気にしないでください」

その後も二人は、自分の故郷について話したりして少しずつであったがお互いのことを知っていた。

「じゃあ、ゼロさんは両親のことをあまり覚えていないんですね」

ゼロはうなずく。シェイルは辺りを見回し今どこの駅なのか確認する。

「私は次の駅ですが、ゼロさんはどこまで乗るんですか？」

ゼロも今の駅を見て、あと三つ先です、と答える。シェイルは、シュンブル駅で列車を降りた。一人になったゼロは一息つき、何も考えずにぼけっとしていた。するとそこに一番会いたくない者が現れた。

「やあ、ゼロ！」

その声にゼロはすぐさま頭を抱える。

「何でお前がここに居るんだ」

「なんだよ。そんな言い方はないだろ。なあ、なあ、なあゼロ！今さっきまで一緒にいた美人とどういいう関係なんだよ」

となりの席に座ったアレンがゼロを肘でつく。

「どういつ関係って俺のパートナーたが」

アレンは大きく目を見開いた。

「今日、初めて会ったんだろ。あの人は、お前のことを知っていたのか？」

「いいや、初対面だ」

「ならなんで了承してもらったんだあ。あゝオレも、あんなにカワイイ娘がパートナーになるなら、単独機のパイロット候補生には志願なんてしなかったのに！」

ゼロは急に声を上げる。

「そういうことか、だからお前は別の講義室だったのか」

「ああ、そうとも。オレは一生一人で戦う。お前はいいよなあ。あの娘と、あんなことやこんなことができるなんて」

「なっ。お前何か勘違いしてないか？ 人生のパートナーじゃないぞ。アシスタントとしてだ」

アレンは目に涙を浮かべている。

「お前のようなかつこいい男を逃がす女なんていねーよお」

「ほら、着いたぞアレン。しっかりしろ、いつものお前はどこに行つた」

アレンは下を向いたままであつたが、ゼロと一緒に列車から降りた。列車がいなくなつても、

アレンはホームから動こうとしなかった。

「おい、アレン何か他に嫌なことでもあつたのか」

アレンはゆっくりと顔を上げた。

「ゼロ、もしかして心配してくれたのか。なあ、心配してくれたのか」

いつのまにかアレンは悪巧みがうまくいったといわんばかりの顔をしている。

「ハッハッハッハッア」

アレンは腹を抱えて笑い始めた。

「オレがあんなことで悲しむと思ったのかぜー口」

「お前！」

「そうさゼロ、お前はオレにまんまとだまされたのさ。いい女見つけたからって調子に乗るなよ」

あーばいよ、と手を上げアレンはさっそうと帰っていった。ゼロは二度とアレンを心配しないことを心に刻み込んだ。家に帰り着いたゼロはシェイルからメールが来ていたのですぐに再生させた。

「えつとゼロさん。明日、もし時間があれば一緒にお買い物にでもいきませんか？ お互いをもっと知る機会にもなると思うので。連絡待ってます。……以上です」

特に予定もなかったのでゼロはシェイルにどこで待ち合わせするかを話した後、明日どんな話をしようかと考えながら夕食を口にしていた。ゼロは食べ終わっても考えがまとまらず、悩んでいた。手元の端末で時間を見るとすでに日付が変わっている。洪々ゼロは考えるの止め、一日の疲れを洗い流すと、すぐに眠りに着いた。

第2章：夢か真か

人々の行き交いが絶えないここは、ユーバの数多くの都市でも一、二位の賑わいをもつ都市エンタールのとある場所である。その場所は、ビルとビルの間になされた空中公園であり、人々にとって恰好の待ち合い場所であつた。

ゼロは、その中央に設けられた噴水に向かって設置されているベンチでシェイルを待っていた。約束の時間よりかなり早く着いたので、ゼロは目まぐるしく形を変える噴水をただ眺めていた。横から人が近づく気配がする。

「ごめんなさい。待たせてしまつて」

申し訳なさそうな顔でシェイルがやってきた。ゼロはすぐに立ち上がり、シェイルを迎える。

「いいえ。元々早く着くつもりで家を出たので、それにまだ約束の時間にもなっていないかもしれませんし気にしないで。さあ、行きましょう」

シェイルは納得できなかったが、ゼロが構わず歩き出したので、しかたなくついて行く。シェイルはゼロの傍らを歩きながらゼロの顔を伺う。どうやら機嫌は良さはそうだ。カッコイイ顔してるなあ、とじつと見つめていることに気づきシェイルは頬を赤く染め慌てて

前を見る。

「シェイルさん」

急にゼロから声を掛けられたシェイルは声を裏返しながらも返事をした。

「ところでどこに行きますか？」

「服を買いに行こうかと。場所は分かるので、私が案内します」

それから二人の会話は止まってしまった。シェイルは私から誘ったんだから私から話さないと、思い何を話そうか考える。しかし先に話したのはゼロだった。

「シェイルさんは、ここに来るの初めてですか？」

「いいえ。2回目ですよ」

「広いですよねここ。クローイスには連絡橋はありましたが、空中公園なんていう広さのものはありませんでした」

二人の横を子供たちが元気よく走り去って行く。

「そうですね。私も初めて見たときはびっくりしました。大きな木があったり、噴水があったり。とても開放的で、いいなあと思いますけど。一度雲よりも高いところからビルを見下ろすのってどんなふうだろうって興味本意でやったことがあるんです」

「どうでしたか？」

「百聞は一見に如かずです。」

シェイルはゼロの手を引き、空中公園の端まで連れて行く。ゼロは、手すりを握り締め見下ろす。真下は、薄い雲で覆われているものの、その少し先にはシールドパイプや、車道を見ることができるよう横を見ればゼロと同じように下を見ている人が少しばかりいた。

「どうでしたか？」

いつの間にかシェイルが顔を上げこちらを見ていた。

「よくこんな所に公園作ったなあって。そろそろ、服を買いに行きますか」

任せてください、とシェイルは笑顔で応えた。

目的地に着くと早速シェイルは服を選び始めた。ゼロも服を選び

に行く。ゼロは上着を二着買つとまだ選んでいるシェイルの元へ行く。

「ごめんなさい。どれにしようか迷つていて」

シェイルは三、四着手にしている。これが似合いますよ、とゼロはそこから一着を指差した。

「そうですか。じゃこれにしようかな」

シェイルは、ゼロからすすめられた服を買った。さりげなくゼロは、シェイルが持った買い物袋を手にする。

「持ちますよ」

「すみません。ありがとうございます」

「そろそろ、お昼ご飯にしませんか？」

「そうですね。何か食べたいものとかありますか？」

「この郷土料理なんてどうですか」

シェイルはうなずき、ユーバの郷土料理があるレストラン街へ向

かった。レストラン街には、十店舗ほど各国の郷土料理店が並んでいた。ユーバの料理店の入るとウェイトレスが二人に声を掛ける。

「いらしゃいませ。何名様ですか？」

「二名です」

「二名様ですね。では、ご案内いたします」

二人は大きな窓側のテーブル席に案内された。

「じゅつくり、おくつろぎください」

ウェイトレスは、その場から離れ持ち場に戻っていった。

「どれにしますかゼロさん」

シェイルは、置いてあったタッチパネルを手を取った。ゼロは、迷わずオススメと書いてある料理に手を触れる。シェイルは別の料理を選んだ。三十分くらいたつと頼んだ料理が運ばれてきた。

「以上でよろしかったですか」

二人がうなずくとウエイトレスはこの場から去った。

「このあと、どうしますか。ゼロさんはどこに行きたい所はありますか？」

「特にないですが、どんな店があるのか歩き回りたいです」

「そうですね。私もあまりここに来たことがないので、そうしまし
よう」

支払いは注文と同時に終わっているので食事を済ませると二人は話しながら店を見て回り始めた。

第2章：夢か真か？

「そういえば、ゼロさんはどこの講義室で説明を受けましたか？」

「第一講義室ですが」

「そこはかなり強面の教官、いませんでしたか？」

「グヴェー教官のことですか？　いましたけど」

「第一講義室を横切った時すごい大きな怒鳴り声が聞こえたんです」

ゼロは首を傾げる。

「私がいた時には怒鳴ってはいませんでした。有名な鬼教官らしいですよ」

「できるだけ関わりたくないです」

シエイルは不安そうな顔をしている

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

「そうですか？」

急にゼロは足を止た。ちょっとこの店に寄っていいですか、とことわりを入れ、ゼロは機械の様々なパーツが売ってある店に入る。

パーツはきちんと整理されていて、シェイルには分からない部品がひしめき合っている。店内はとても広く、パーツ別に細かく分別された棚によってまるで迷路のようになっていた。シェイルは迷子にならないように、ズンズン進んでいくゼロにしっかりとついていく。

「ゼロさん。何を買うのですか？」

「ああ、愛犬のパーツを買おうかと」

「ペット飼っているんですか？」

「犬っていつでもロボットですけど。両親が生前、市販のペットロボットを改造して戦争で使っていたんです。戦争用といっても、ロボット兵器とまではいなくて、サポート役のように使っていたみたいです。もちろん今は、武器一つも積んでいないですけど」

「そうなんですか。そうだ、今度つれてきてくれますか？」

ゼロは笑顔で頷いた。棚から細い線を取り出す。そして腕の端末を見て買すべき物を再度確認すると、すぐ横の棚のケースから球体の物体を手にとった。

「ふう。これでそろった」

ゼロが購入を済ませると、二人は店を出て再び探索を始めた。

「シェイルさんはなぜ軍に入ろうと思ったのですか。」

シェイルは首を捻る。

「そうですね。いろいろ理由はあるんですけど、戦争で亡くなる命を一つでもなくそうと思ひまして。ゼロさんは？」

「私は里親から勧められたので。里親も軍人でしたから。これくらいですかね。まあ、はっきりとした理由はないってことです」

日が傾き、大地をビルを空を赤く染める。

「そうだ。この階にとっても人気があるケーキ屋さんがあるんです。あの時もゼロさん、ケーキ食べてましたよね」

ゼロは慌ててシェイルの誤解を解く。

「食べてましたけど、好きというわけではありません」

シェイルは少し残念そうな顔をする。

「嫌いつていうことはありませんよ。行きましょう」

人気というだけあって、ほぼ席は埋まっている。二人は少し待たされ後、カウンター席に案内された。シェイルは長く悩んだ上、チヨコレートケーキを選ぶ。ゼロは、すでに当店の一番人気と大々的にすすめてあるケーキを選んでいた。

そんなゼロを見て、シェイルは昼ご飯のときもオススメを選んでいたし流されやすい人なのか、はたまた面倒くさがりやのどちらだろう、と感じた。

「おいしい。来て良かった。……ゼロさん。どうかしましたか？」

なかなか手を進めないゼロをシェイルは不思議に思った。

「いいえ。少し考え事を。いただきます」

ゼロは、コーヒーに手を伸ばし、一口飲む。コーヒーはミングさんのほうが入れた方がおいしいなと思っていると、シェイルも同じようにコーヒーをすこぢり不満げそうに目になっている。

「シェイルさん」

「はい？」

「明日は空いていますか？」

「ええ。空いてますけど」

「自然保護区に行きませんか？」

シェイルは首を傾げる。

「構いませんが、どうしてですか？」

「シェイルさんも自然が豊かな場所に住んでいたと言っていましたよね。それに話したいことがあるので」

わかりましたとシェイルは頷く。

「今日は、車できているので家まで送りますよ」

ゼロは立ち上がりシェイルの手を取る。

「あつ、ちよつとゼロさん！」

ゼロは、シェイルの手を掴んだまま歩いている。しかしゼロは急に足を止めた。

「……シェイルさん」

ゼロは真剣な眼差しでシェイルを見ている。

「シェイルさん。車庫までの道がわかりません」

「……へッ？ あっああ。案内します」

まだシェイルの手は握られている。

「ゼロさん。手を……」

ゼロはすぐに手を放した。

「すみません。シェイルさん。とっ、とにかく行きましょう」

シェイルはけっこう大きかったなあ、と握られていた自分の手を見つめた。

車庫に着くとゼロは端末で車を呼び出す。機械の動く音がした後、車が大きなアームで持つてこられた。ゼロの車は後部座席があるのだが、とても大人二人が座れるほどのスペースはない。荷物をトラックという名の後部座席に積み二人は車に乗った。車の窓はウォールリンクではなく透明な素材で、できていた。ゼロは運転席に座るとハンドルを握り、アクセルを踏む。シェイルは、ゼロが運転しているので不思議に思った。

「ゼロさんは自分で運転するんですね」

「ええ。疲れているときはさすがに自動運転にまかせますけど。できるだけ自分で運転したいので。ベルタール第四地区であってますよね」

「はい」

ゼロは普段自分で運転しているとあって自動運転と変わらない乗り心地だ。

車はベルタール第四地区内に入り、ゼロはシェイルが指差すとおりに進む。

「ここで大丈夫です。ありがとう」

「気にせず、じゃあ明日ここに朝の8時に来るので」

「8時ですね。わかりました。待ってます」

シェイルがエレベーターに乗ったのを確認すると車を自宅へと進めた。

第2章：夢か真か？

ゼロは自宅に帰り着くと、大型ロボットを手に取り話しかける。しかし、ロボットはうんともすんとも言わない。ゼロは、バックから買ってきたパーツを取り出し、ロボットの外装を外す。

「ユオン、少し触らせてもらうぞ」

銀色の服を脱いだユオンは、かなりごちゃごちゃした内部をさらけ出す。ゼロは絶縁体で作られた手袋をはめると、ユオンの本体から真っ黒に焼け焦げた球体を取り出し、新しい物に付け替える。すっかりと取り付けられていることを確認すると、導線を取り出し、古くなった物と次々に取り替えてゆく。この間ゼロは夕食を一口も口にしていない。また、かなり時間もたっていてさっきからゼロに睡魔が襲い掛かっている。

やっとのことで全ての取り替えが終わったのだが、ベットに行く気力もなくゼロは、そのまま寝てしまった。

真っ暗で、何の音も聞こえない世界に一人の幼い少年がぽつんと

座っている。

彼の周りにはおもちゃが散乱していて、彼のいる所だけ仄かな光が照らしていた。

彼はおもちゃで遊ぶこともなくただ下を向きじつとしている。時々彼は顔を上げ漆黒の世界を遠い目で見ては顔を下げていた。

突然、彼が見ていた方向に微かな光が現れた。彼は立ち上がると一生懸命その光に向かって走る。しかし、ちつとも光に近づくことはできない。それでも彼は走り続けた。呼吸が乱れ始めついに彼の足は止まってしまった。だが、まだ彼の目の先には光がある。必死になって、届きそうもない光に手を伸ばす。

すると、急に光は目を開けていられないほど強く光り彼に近づいてきた。

光は手に触れるほど近づくと次第に暗くなり消えてしまった。彼は恐る恐る目を開く。そこには、彼の手をしっかりと握っている少女がいた。

彼女は微笑み、やさしく、そしてそつと彼に声を掛ける。

「一緒に遊ぼう」

ユオンは、目覚ましが鳴っているのに起きないゼロを大きく揺さ振っている。

「んっ……………」

ゼロは、はつと目を覚まし立ち上がる。

「ユオン今何時だ！」

ユオンは呆れた様子でゼロの心に語りかける。

『大丈夫だ。いつも起きている時間だ。それよりもゼロ！　いつまで私をこのままにしておくつもりだ。大体急に起きたら体に悪いといつも言っているだろう。試験は合格したのか？』

「合格した。そうそう、今日はお前にも付いてきてもらう。紹介したい人がいる。」

気づけば朝が苦手なはずのゼロがせつせと出掛ける準備をしている。リビングから出て見えなくなったゼロにユオンは強めに語る。

『ほおー。女か？　ぜひともそれは一度拝見したい。……ああ』

自由に動かない体に苛立ちユオンはその場で飛び跳ねる。

『わあーい。わあーい。ジャンプするだけで体のあちこちがきしむよー』

シャワーを済ませ、身だしなみを整えたゼロがリビングに戻ってきた。

「そう言うな。今できることは全てやっている」

いちいち話方を変えるなとゼロは悪態をつきながらユオンに外装をつける。

『お前にも女ができたのか。ならばもう女のふりをしなくてもよくなるんだな』

「いつお前に女のふりをしてくれと頼んだ？　性別さえなくせに、まあいいもうすぐ約束の時間だ。車に乗れ」

『はいよ』

ゼロは車を走らせ、シェイルを迎えに行く。待ち合わせ場所にはすでにシェイルが待っていた。ユオンが後部座席から顔を出し、シェイルを観察する。

『ほおー。かなりの別嬪さんやないか！』

ユオンに黙っておけと告げゼロは車から降り、シェイルを迎えた。

第2章：夢か真か？

ユーバ自然保護区。

ベルタール第四地区から車で一時間ほど走り、やっと保護区の入口まで辿り着いた。

入口には武装した警備員が一人立っている。自然保護区は十五階建てのビルほどの高さを持つ、分厚い壁が周りを囲んでいる。また入口はここ一つしかなく、必ず警備員による検査を受けてからしか入ることができないようになっている。

ゼロは速度を落とし、入口に近づく。すると警備員が歩み寄ってきた。

「身分証明を呈示しなさい」

二人は携帯端末を警備員に見せる。警備員は、確認すると車の中を調べ始めた。

「ん？ このロボットは何だ」

警備員はユオンを指差す。ただのペットです、とゼロはすぐに応えた。

「そうかならないんだ。トランクを開けなさい」

言われたとおりにトランクを開ける。警備員は、何も入っていないことを確かめると、どこかに連絡し始めた。

「男女二人、ロボット一体、チェック完了。門を開けてくれ」

ゆつくりと大きな扉が口を開け、ゼロたちを迎える。扉の向こうからは保護区だ。保護区内は車道が狭く、両脇には木が行儀よく並んでいる。少し進むと森が開け、車が2〜3台入りそうな場所に着いた。

しかし、その先からは、道は舗装されておらず、車で行くことができない。どうやらここで車から降りろということのようだ。二人は、車から降り、その後をユオンが付いていく。

歩けば歩くほど森林は深くなり、周りには見たこともない大きさの木が生い茂っている。また、コケが木の根元だけでなく、二人が歩いている道まで被い、その光景が一層異世界感を引き出していた。

シェイルはてつきり動物がたくさんいて、それを見ようとたくさん家族がやってきているものだと思っていた。しかし現実には、遠くの方から聞こえてくる微かな鳥の囀りと森と森と森。まず、入口

の前に武器を手に行っている警備員がいたところから思い違いをしていると感じていた。

次第に、そもそもここは何だろうという疑問が沸いてきた。たまらず、ゼロに質問した。

「ゼロさん。ここはこんなにも何で厳重に守られているんですか」

「昔、この森のどこかにオーバーテクノロジーの一つがあった、という噂を聞いたことがあります。が本当のことは、分かりません。まあ、あれだけ厳重にしていれば普通の自然保護区とは違うということとは確かです」

ゼロは急に立ち止まり、ユオンを呼び寄せた。

「ユオンこの岩、登れるか？」

ユオンは何も言わず、足から鋭い爪を出し、ほぼ垂直の大きな岩の壁に登りだした。

「ユオン、という名前なんですな」

シェイルは絶壁をよじ登るユオンを見つめる。

「幼いころからの友人です」

「そうは見えませんが」

首を傾げるゼロにシェイルは話を続ける。

「だって、古くからの友人ならあんな崖を登れなんて言いませんよ」

ゼロが抗議しようと口を開こうとしたとき、二人の心にユオンが語り掛けた。

『おお！ やつとこの私の惨めさを理解してくれる者が現れたのか。シェイルとかいう名だったなあ』

シェイルは、耳では聞こえない始めての心の声に戸惑い、声の主であろう崖の上にいるユオンを見上げる。

『すまないね。心の声は初めてだったか』

「はい。えっと、バイロス・シェイルと申します」

崖を登り終えたユオンは、体から金属製のロープを出す。

『そう硬くなるなるなシェイル。もしかバイロス・グレイブの娘か？』

「はい……。あつ、うんそうだよ」

『そうそう、それでいい。やはりそうか。顔立ちは似ておらぬが、よくニコツとするところは父親譲りだな。さあ、立ち話しも終わりにしよう。ゼロ、準備はできているぞ』

ゼロはロープの先についたグリップを握る。

「シェイルさん。これの使い方は知っていますか？」

「はい。知っていますよ」

二人の会話を聞きあきれたユオンが声を上げる。

『そこのお二人さん。もっと仲良く会話はできんかね』

ゼロとシェイルはお互いを見つめ合う。そして照れ合った。

『もついい。さつさと登って来い』

ゼロはロープについていたグリップを強く握るとグリップがロープを伝って上に上がる。ゼロが登り終わるとシェイルも続き、大きな岩を登った。登った岩はこの森林で一番高い所に位置し、森林全体を見渡すことができる。

「それで、ゼロさん」

『こほん!』

「……ゼロ。話してなに？」

ユオンは一人頷いた。

「……シェイル。俺が話したかったことは夢についてだ。夜に見る夢だ。子供のころの夢の中に女の子出てきていたんだ。その子がシェイルさんに」

『こほん!』

「シェイルにどこか似ていて。まさかとは思うが違うよな」

ゼロの言葉にシェイルは固まる。シェイルも幼いころに夢でゼロに似た男の子と遊んでいたからだ。

「えっ。もしかして、昨日もその夢見ましたか」

『ん？』

「見た？」

ゼロはああ、と強く頷く。

「じゃあ、あの男の子は幼いころのゼロ？」

シェイルはゼロの顔を見て夢で出会った男の子と比べているようだ。

「本当。そっくり！」

ゼロは恥ずかしそうに顔を伏せる。

「ゼロ、またね」

「ああ」

シエイルは、エレベーターの前でゼロに向かって手を振っている。振り返さないゼロをユオンがど突く。

シエイルがエレベーターに乗るとユオンとゼロは駐車場に歩き出す。

「はあ〜」

やけに長い一日が終わり、車に乗り込んだゼロは溜め息をついた。

『何がはあ〜だ。少しは感謝しろ!』

「ああ。そうだな」

『ほれ。さっさと車を動かせ。帰るぞ!』

ゼロはまた溜め息をつき、車を走らせ家に向かった。

第3章：新たな一日の始まり

長かった休日も終わり、今日から本格的な講義が始まる。

ゼロはユオンを家に残し、いつもと変わらない時間に家を出た。列車に乗るとゼロはシェイルにメールを送る。そして、シュンブクル駅でシェイルがゼロと同じ車両に乗り込んだ。シェイルはゼロを見つけて、隣の席に座る。

「ゼロ、おはよう」

「おはよう」

二人は目を合せ挨拶をした。

「いよいよだね」

「ああ、そうだな」

そう言つとゼロは外を見つめた。

「何を見ているの？」

ゼロは視点をシェイルに戻す。

「ん？ 外を眺めているだけだ」

シェイルの手を握り、再び外を眺め始めた。風景が次第に変わり軍用施設がちらほらと現れる。列車は軍教育センターの最寄り駅に着き、二人は降ると歩きだした。

センター内に入るとそれぞれの集合同所に分かれた。ゼロはこの前と同じ場所である第一講義室に向かった。席は決まっていなかった。うなので適当に座る。少し待った後、時間通りにグヴェー教官が入ってきた。同時にゼロは立ち上がり、ほかの候補生も息をぴったりと合わせ立ち上がる。敬礼をして、グヴェーの指示で候補生たちは席に着く。

「よし。よく聞け、今日からお前たちはパートナーを決め早速、講義を受けてもらう。そこで、今からパートナーと行動してもらう。パートナーが決まっていけない者はいるか？ いるならば挙手しろ」

すると、数十人が手を上げた。

「まあ、こんなものだろう。決まっている者はA-63室に移動しろ。決まっていない者はC-5室に移動だ。以上。さっさと動けよ」

了解と候補生たちは返事し、出て行った。

A-63室に入ると、すでに席に二人一組で座っている者とパートナーを待っているものが前の方で集まっていた。その中からゼロはシェイルを見つけ出し、声を掛ける。

「シェイル」

「あつ、ゼロ」

二人は端末を持った教官らしき女性に登録してもらった。

「ストラウド・ゼロ。バイロス・シェイルだね。登録完了っと。そこら辺に座ってて」

二人は座って話しながら待っていると、後ろから声を掛けられた。

「シェイル、久しぶり」

振り向くとそこには背の高い女性が座っていた。

「ユミル！」

ユミルはゼロをじっと見る。

「この人は？ シェイルのパートナー？」

シェイルは大きく頷いた。

「へえ、こんなかつこいい男どこで見つけたのよう」

「えっと。合格発表の帰りに寄ったカフェでユミルも会ってたんだよ」

「えっ、本当？ 気が付かなかった」

シェイルはユミルの隣を見るが、そこには座っていない。

「ユミルのパートナーは？」

「トイレに行ってる。来たら紹介するね。で、紹介してよシェイルのパートナー」

「うん。彼はストラウド・ゼロ」

ゼロは、何も言わず軽く頭を下げた。どしどすと足音が聞こえてきそうな、大きくがっしりとした体付きの男がやって来た。

「何だ。まだ始まっていないのか。ユミル、そのお二人さんは友人か？」

「シェイル、この人がディオネさん」

シェイルは首を傾げながらディオネを見上げる。

「あれ。ユミルってタイプ変わった？」

「そっ、そうかな？」

「そうだよ。だっていつもスラリとした男が一番いいとか言ってたよ」

シェイル以外の三人は瞬時に固まった。ここで話す内容じゃないだろう、とゼロはシェイルを見た。ユミルさえ無反応だったのでシェイルは、私へんなこと言ったというような目でゼロを見つめてきた。

「あつ、そろそろ始まるみたいですよ」

ゼロは何とかユミルとディオネの意識を戻すことに成功した。

第3章：新たな一日の始まり？

ゼロが思っていたよりも早く席は埋まり、候補生たちは話を止め、前に注目し始めた。

前にいる教官たちの中から一人の女性が一步前に出る。

「候補生のみな、おはよう。私は、今日から君たちを指導するルミオンだ。それでは今日の抗議を始める。」

候補生たちは、端末を取り出し、講義内容を記録していく。

「スクリーンに注目しなさい」

机にあるスクリーンに飛行機らしき物体が写し出される。

「今日は、大まかなことしか話さないから、別に記録する必要はない。では、まず始めに戦闘機の役割について話しましょう。戦争のおいて、最も重要となるものは戦闘艦だ。

戦闘艦には、大型のエネルギー砲や大出力のエネルギーシールドが装備されている。だが、敵艦も同じくエネルギーシールドを持ち、戦闘艦のエネルギー砲をもってしても破壊することはできない。

そこで、戦闘機の出番だ。戦闘機でエネルギーシールドの力が及ばない距離まで近づきエネルギーシールド発生装置を破壊しシールド

を無力化。そして味方の戦闘艦近づく敵戦闘機を迎撃。

これらが、戦闘機の仕事であり、任務でもある。次に戦闘機について。戦闘機は三種類に分けることができる。一つ目は宇宙戦専用のもの、二つ目は水中戦専用、三つ目は宇宙、水中、空中での戦闘が可能なものだ。で、早速だが今ここでどの種類にするか決めてもらう。質問がある者は挙手せよ。」

ルミリオンは候補生たちを見つめ誰も質問がないことを確認する。

「よし。それでは休憩時間を与える。その時間内で決めておくように。以上休憩に入れ」

教官たちが退室した後、ちらほらと部屋を出て行くものが現れ、シエイルとユミルも部屋を出ていき、ゼロとディオネは残ることにした。

二人は会話も交わさずにいたが、ディオネがゼロの隣に移動してきた。

「えー。ゼロだったけ？」

ゼロは目を合わせずに話す。

「ああ、そうだが」

「なあ。ルミリオン教官ってスタイル良いよな。見たかあの胸？」

ゼロはつまらない、と言わんばかりにそっぽを向く。

「あれま。興味を持つ話題と思ったんだが。シェイルさんも胸デカイし……」

ゼロは立ち上がりディオネを睨み付ける。

「何が言いたい」

「いやゝ。そのゝ」

さらに鋭い目でディオネを威嚇する。

「お前さんと、話がしたかっただけで、別に悪い意味で言ったわけじゃない」

依然として睨み付けていたゼロだったが、何故俺は怒っているのかという疑問が生まれるとすぐに謝った。

「すまない。怒鳴って悪かった」

ディオネは少し困惑しているゼロの肩に手を乗せる。

「それだけシエイルさんのことが好きだということだ。よし、あらためて、ご挨拶としよう。ラグル・ディオネだ。よろしく」

ゼロはディオネに顔を向け手を差し出す。

「ストラウド・ゼロ。こちらこそよろしく」

そしてディオネは、立ち上がったままのゼロと握手をした。握ってみるとディオネの手はゼロよりも大きくごつごつしていた。

手を離すとディオネは何かを思い出そうとしているのかストラウドと繰り返し返している。

「うん？ ストラウド、……！ もしかして、最優秀候補生か？」

ディオネが驚いた顔をする中、ゼロは頷く。

「こんなところで会えるとは。歴代一位の優秀さと聞いたぞ」

「そこまでは知らないが」

ゼロは音を立てずにゆっくりと座り、心を落ち着かせる。デイオネは、ゼロの怒りを買わないような話しを考えるが、下手に話し掛けるのはまずいと思い、結局黙ることにした。

第3章：新たな一日の始まり？

そうこうするうちに、シェイルとユミルが戻ってきた。

ディオネは自分の席に戻り、ユミルと話し始めた。シェイルもゼロと話そうとするが、ゼロは眉間にしわを寄せ何かに悩んでいたの
で、解決するまで待つことにした。

しかし、休憩時間が終わりに近づいてもゼロに何も変化はなかった。シェイルは耐えかねて、ゼロに声を掛ける。

「ゼロ、。何をそんなに悩んでいるの？ もうすぐ終わっちゃうよ、
休み時間」

「……。ん？ 何か言ったか」

シェイルは溜め息をつき、あきれながらも、再び同じ質問を告げる。
る。

「もう、何を悩んでいるのって言ったの」

「いや、大した事じゃない」

まあいいや、とシェイルは開き直り、決めておくようにと言われ

たことについて話しを変えた。

「ゼロは決めた？ 機体の種類」

「ああ。三つ目の機体がいい。シェイルは？」

シェイルは肩の力を抜き、ゼロを見つめ自然とゼロの手を握る。
ゼロも口元を緩めた。

「私もそれで良いよ」

ユミルが、二人の様子を見て思わず口を開いた。

「とても一週間で、出来た仲とは思えないわ。ラブラブねお二人さん。でもあんまりイチャイチャしていると悪い教官に目を付けられるぞー！」

そう言われてシェイルは、顔を赤く染め、ゼロから手をなごりおしそくに離す。

休憩時間が終わり、ルミリオンが指示を出し始めた。

「それでは、一つ目の宇宙用を希望する者はA - 50、二つ目の水

中用を希望するものはD・65、三つ目は、ここに残れ。以上、各自移動を始めよ」

全体の三分の一程が退出していき、それに伴って教官たちの中から退出する者もいた。移動が済むと、ルミリオンに変わって男性の教官が教壇に立った。

「皆さん、こんにちわ。私は、機体担当のライマツトです。今日は、機体の基礎知識についてお話しいたします。もしかするとすでにご存知のこととも出てくるかもしれませんが、復習だと思ってしっかり聞いてくださいね」

ライマツトは、教卓のスクリーンを操作し、戦闘機を写し出す。

「皆さん、机の画面を見てください。これが戦闘機、詳しく言いますと全空間対応型戦闘機です。第一種戦闘機とも呼ばれたりします。ちなみに第二種戦闘機は、無重力下専用戦闘機、第三種戦闘機は、水中及び液体下専用戦闘機と呼んでいます。第一種戦闘機の特徴は、空中、宇宙、水中の三つの空間で戦闘可能ということです。もちろん難点もあります。

宇宙で戦闘を行う場合、翼を持っている分表面積が広く被弾しやすくなります。水中では、水中用のエンジンではないので、ステルス性能が極端に低いですし、翼が大きな抵抗となってしまうます。また、空中、宇宙、水中でのおの機体のバランスを変える必要があります、そのための余分なコンピュータが、必要になります。しかし、それらの難点を踏まえても全空間対応とはとても魅力的なのです」

第3章：新たな一日の始まり？

ライマツトは講義室を見回し、候補生の様子を伺う。

「そうそう、この機体はおそらく皆さんが始めに乗ることになる戦闘機で、正式名称はKW - AS804Cです。

戦闘機にはランクがあります。階級ごとに乗れる機体のランクが決まっていて、一番低いランクからC級、B級、A級、S級、SS級となっています。この機体は、C級ですが第五期、最終形で現役時代はA級でした。おっと、第五期というのは。第五次共帝戦争時のことを表し、最終形というのはその中でも文字通り最後に設計されたことを表しています。

因みに、KW - AS804Cは、クロス・ウイング社製です。クロス・ウイング社は、低コスト、ハイパフォーマンスである機体を作り上げる企業です。生還率も高いですよ」

ライマツトが続けて話そうとすると、ルミリオンがわざとらしく咳払いした。

「おっと。私としたことが、余談はこれくらいにしときましょう」

ライマツトが、スクリーンの機体の後ろの方に触れると映像が変わり筒状の物体が映る。

「これが、エンジンです。このエンジンの仕組みは、エンジンブレードと呼ばれる羽を数枚、放射線に取り付けます。それを数個、軸に固定します。すると、タービンのような形になります。そして、その軸を高速回転させます。そうすることで、エネルギーを生み出すのです。」

エンジンブレードは、特殊鉱石グリネシンを用いて作られます。稼動中は大量の熱が生じます。グリネシンは熱には強いのですが、温度が高くなると、効率が悪くなってしまいます。そのため、大量の冷却水が必要です。また、グリネシンは強度が低く、長く使い続けると金属疲労を生じるため注意が必要です。エンジンはメーカーによって、エンジンブレードの形状や大きさ、総枚数が異なります。つまり、個々に適したエンジンが作れるということです」

ライマツトは、映像を戦闘機に一度戻し、今度は緩やかなカーブを描く先端部に触れる。すると、カプセルを少し傾けたような物体が現れた。

「これがコックピットとなります。通称アエネアスです。本名は精神同化コントロールシステムです。コックピットには、スクリーンも操縦桿もあります。全て、頭の中に直接映し出され、頭の中で操縦するのです。」

このシステムの確立によって、より早く操縦することができるようになりました。もちろん、すぐにこのシステムを使いこなすことはできません。完璧に操れるには、3、4年かかるでしょう。一様、アエネアスが壊れたときでも操縦できるように、操縦桿やスクリーンが設けられた機体もありますが、殆どがアエネアスのみです。

まあ、今の人達は身近なものとして、すでに使っているのですぐに

慣れると思いますがね」

特別講義？（設定資料）

ここでは、ライマツト教官が設定資料について詳しく教えてくれるページです。今回は、戦闘機の企業についてです。

戦闘機部門

ヒロード・エス・オリンポス社

初めてSS級の機体を作り上げた企業。創設者の口癖である。「性能第一」の信念に則りコストには手をつけない。あまりにも高額なので、機体の愛称に宝石の名前がつけられる。

また最も多くの傑作と呼ばれた機体を作っていることでも有名。

一言コメント

えー、この企業の戦闘機は高すぎるのでエースの中のエースしか乗ることができません。

真に残念ながら、私は一度も乗ったことはありません。死ぬ前に一度でも良いから乗ってみたいです。乗ります。乗らせてください。

クロス・ウイング社

低コスト・ハイパフォーマンスを掲げる企業。生還率も高いため搭乗者に信頼を受けている。

一言コメント

この企業には長い間お世話になりました。私も何度助けられたことか……。いえ、決して操縦が下手ということではありませんよ。

プラネット・エンタープライス社

今では珍しくなった、エンジンのみを作る企業。主に、ビロード・エス・オリンポス社に提供している。グロスウェル一速いエンジン『KR7866SB』を製作。

一言コメント

この企業こそ宇宙一といっている程のエンジン企業です。そうそう、宇宙の果てプロジェクトに採用されたエンジンもこのものです。えっ？宇宙の果てプロジェクトを知らないですって！！それは、いけませんね。特別にお教えしましょう。宇宙の果てプロジェクトとは、宇宙が広がる速さよりも速いスピードをもつ乗り物を作り、宇宙に果てがあるのか調べるといふ壮大なプロジェクトです。第三次共帝戦争後すぐに始まり、この瞬間も宇宙のどこかで果てを目指しているはずです。実は、運用開始から一年足らずで行方知れずに……。でも私はまだ、この宇宙のどこかにいると信じています。えっ、一言コメントになっていないって？ そんな今さら言ったって遅いですよ。因みに私は、一度プラネット・エンタープライス社のエンジンを使いたいと上官に言ってみたのですが、お前など必要ないと却下されました。

テクニカル・ユニオン社

様々な分野の集合体企業。戦闘機に必要な分野は全てそろっている、他に類がない完成度を誇る

一言コメント

テクニカル・ユニオン社は、セントローレンス社、アルゴル社、リザリオ・アエイター社、オリフェエル社が合わさった集合体企業です。

機体のみを作る企業の場合、戦闘機を完成させるためには、エン

ジンや兵器が必要です。そこで、エンジンを作る企業や兵器を作っている企業などからパーツを選択し、組み合わせます。このため、設計の時点で制限が生まれてしまいます。例えば、機体を専門に作る企業A社が新型機を設計しています。そこでA社はB社のエンジンCを採用することに決めました。しかし、新型機にはある特殊な装置を搭載予定しているので、エンジンCは大きすぎ搭載できません。だからといって、搭載可能なエンジンDにすれば、性能が落ちてしまいます、とこのようなことが実際に起きているのです。オーダメイドという選択肢もありますが、これではコストが上がってしまいます。

えっと、まあ実を言うと最近では、ほとんどの企業が自社で全て開発し、製作しています。ですが、今までエンジンを作ったことのない企業が急に性能の良いエンジンを作ることなど不可能なのです。そこで名乗りを上げたのが集合体企業です。集合体企業は設計時に機体、エンジンなどの設計を同時に行うことで完成度の高い戦闘機を作ることができます。

マンティコア・グループ社

テクニカル・ユニオンと同じ集合体企業。機体性能は並みだが、頭脳部分の性能は高く、一人乗り用の戦闘機に適している。

一言コメント

この企業は一人乗りの戦闘機を中心に作っています。一人乗りの

戦闘機は、アシスタントがいないのでそれに相当する仕事をこなす人工知能が必要です。マンティコア・グループは最も優れた人工知能の技術を持っていると言われています。

ブリザルンバ社

新しい企業。他社のパーツに合いやすい機体を作り、完成度は個体企業にしては高い。

一言コメント

この企業は、集合体企業ではありませんが、とても完成度が高いことで有名です。その理由は技術者がそれぞれの分野のエキスパートであるからです。少しコストは高めですが、SS級の戦闘機を製作しています。

第3章：新たな一日の始まり？

再び先程と同じことをして、機体の中央部に触れた。映像が変わり、部屋のようなものになる。

「最後に居住区まあ、居住スペースとも呼ばれますが、これについてです。戦闘は一日、二日で一度帰還する時があれば、1か月、一年も長期に亘って一度も帰還せずに戦い続けたり、単独で長距離を移動することがあります。

そのような場合には、食事をしたり、睡眠が必要になってきます。そこで、戦闘機には居住区が設けられています。居住区には、キッチンやベット、シャワールームなど日常生活において必要なものが備わっています。お世辞にも広いとはいえないスペースですが、不自由は何一つありません」

ルミリオンが、はあ？と思わず声を上げた。そして、そのまま胡散臭そうにライマツトを見る。

ディオネがその光景に堪らず声を潜めた笑った。ユミルが慌てて嗜める。

「おやおや、もうこんな時間ですか。一度休憩を入れます。どうぞ自由にしてください。次もこの場所で時間は予定通りです」

解散の指示を出した後ルミリオンとライマツトは退室せずに睨み合っている。一方、候補生たちは上官が出て行くまで座っていない

ければならないので誰一人として動こうとしている者はいない。異様な静けさの中、ルミリオンは鼻で笑うと講義室を後にした。

しばらくして、ライマツトも退室し、やっと平穏な空気が戻ってきた。講義室を出る者がぼつぼつ現れたのでゼロとシェイルも出ることにした。

特に部屋から出た理由は無かったので二人は、廊下の窓から外の様子を窺う。ウォールリンクからは、軍専用の滑走路を戦闘機が行き交いしているのが見え、中にはふらふらしながら、垂直離陸を試みる機体もある。

「やれやれ。あいつは、進歩が無いな」

いつの間にか、二人の後ろで男性の上官が同じように訓練の様子を見つめていた。二人は慌てて急に現れた上官に敬礼をする。上官は敬礼を返すと講義室に入ってしまった。

「みな、揃っているようだな」

先程、敬礼を交わした上官が今日最後の講義を始める。今にしては珍しく白髪頭で顔には深いシワがあった。

「よし。まずは、自己紹介といこうか。私は携行装備について君たちに教える。フェーバだ。」

フェーバは教壇ゆつくりと歩きながら講義を進める。

「何か気になることがあればすぐに手を上げてくれ」

ディオネが早速手を上げようとするが、ユミルの太股を抓る攻撃で上げる気が無くなった。フェーバは足を止め、候補生たちを不思議そうな顔で見つめる。

「うん？ 毎年、私の容貌を見て質問をする者が一人か二人いるのだが……。まあ、少なからず疑問を抱いている者はいるだろう。私は好きで老化を進めたのではない。薬が利かない体になってしまっただけだ。君達も聞いたことがあるだろう。延命治療の薬に対して抵抗する細胞が出てくる人間が増えてきていることを。見ての通り私はその一人だ」

フェーバは話し終えると再び歩きだした。

第3章：新たな一日の始まり？

「私の話はこれくらいにして講義に移ろうか」

フエーバは、候補生たちに映像を送る。

「一見宇宙服にも見えるが、これが戦闘服。というよりパワードスーツだな。パワードスーツとは、宇宙服の機能だけでなく、肉体強化や移動能力を向上させる。言わば、着る兵器だ。パワードスーツは人工筋肉よって動くが、内蔵してあるスラスタで高速移動することも出来る。またステルスシステムが標準装備として搭載されている。」

装甲は主に2つに分けられ、1つ目は大部分を占める厚い主装甲。2つ目は関節など動きが必要になる部分を守る副装甲だ。種類によって防御力は変わってくるが戦闘機のエネルギー機銃の直撃から1〜2発は耐えられる。負傷した際には戦闘を続けながら応急処置が可能で麻酔や止血はお手の物だ。動力源は背中にあるエネルギー発生装置でこれもまた、種類によって変わってくる。また、スラスターからもエネルギーを確保することも出来ぞ。パワードスーツは大きく分けて三種類ある。軽量、中量、重量この三つだ」

画面に大きさや形が異なる武器と思われる物が映る。

「まずは軽量パワードスーツについて。軽量装備は運動量の多い者

向けに副装甲部分を広げ、スラスターを小型にし、数を多くすることにより敏捷な行動が行える。エネルギー発生装置も小型化されているため、高出力の武器は使えない。

ああ、ここで武器について補足しておこう。武器は銃や剣が主なものとなっている。今の武器のほとんどがエネルギーによるものだ。エネルギーの供給方法は、ダイレクト式とシリンダー式の二つだ。ダイレクト式はその名の通り、エネルギーパイプなどを通してエネルギーを直接補給する。この利点はリロードの必要がなく、供給装置が小さくて済むことだ。欠点は、パイプで供給しているため、傷つくとエネルギー漏れが起き、爆発する恐れがある。一方、シリンダー式は予めシリンダー内にエネルギーを充填しておき、それを武器に装填する。利点は、充填する際にエネルギー圧縮が出来ることだ。シリンダースロットが2個以上ある場合は一つ目のシリンダーに二つ目のシリンダーのエネルギーを入れることで装填していても圧縮出来る。このエネルギー圧縮は、ダイレクト式でも可能だが、事前に圧縮は出来ない。欠点はシリンダーにエネルギーを充填する装置が必要となり、さらにシリンダー自体がスペースを取ってしまう。また装填する作業で時間を必要としてしまうことだな。軽量パワードスーツの基本武装はシリンダー式ハンドガン、シリンダー式ブレード、ダイレクト式ブレードだ。まあ、基本武器は必要最低限の装備だからな、本当はもっと多くの武器を扱う。では、ここまでで質問はないか」

ディオネが手を挙げた。まさかここで挙げるとは思っていなかった。なのでユミルは止められなかった。

「おお！ 良いとも。君、名前はなんという」

「はっ。ラグル・ディオネと申します」

ちょっとディオネ、とユミルが立ち上がったディオネを引っ張る。
フェーバは一人で頷き、とても嬉しそうな顔をしている。

「それで、質問は何だ？」

「はっ。基本武装にブレードが含まれているようですが、白兵戦など起こりうるのでしょうか」

「うん、実にいい質問だ。銃という武器があるならそれでやれるだろうと思っているのだな。確かに第二次共帝戦争までは、剣などの至近距離のみ有効な武器は無かったというより考えられなかった。しかし第二次共帝戦後、両国家で攻撃を弱める対エネルギー装甲が開発されると話は変わった。そして、対エネルギー装甲の性質の一つに連続でエネルギーを受けると、弱める能力がほぼ無い状態が起こることが判明すると、エネルギーを連続で照射するエネルギーブレードが生み出された。至近距離において小型な武器でも破壊力をもつ武器として使用されるようになったわけだ。これでいいかね？」

ディオネは頷き、座っていいぞと言われると静かに席に着いた。

第3章：新たな一日の始まり？

「では次に、中量パワードスーツだ。中量はパワードスーツ自体に大きな特徴はないが、幅広い種類の武器が使える。基本武装はシリンドー式ハンドガン、シリンドー式ブレード、リニアール式大型銃などだ。

最後は、重量パワードスーツ。重量と名づけられているが最高速度は一番速い。主装甲を強化した分だけ、スラスターを強力にしている。エネルギー出力も大きいがとても扱いにくいパワードスーツだ。基本武装はシリンドー式ハンドガン、シリンドー式高出力ブレード、シリンドー式重量銃剣となっている。それでは次は……」

今日、全ての講義が終わりゼロとシェイルは一緒に夕食をレストランで取ることにした。そこは若者に人気のレストランであったが、シェイルが予約をしていたので待たされることなかった。テーブルに並べられた彩り豊かな料理にゼロは早速、口にした。

「ねえ、ゼロ」

「何だ？」

「ゼロって人と話すのが苦手？」

思ってもみなかった質問で、ゼロはステーキを口に運ぶのを止める。テーブルの下で聞き耳を立てていたユオンは、ゼロがどう答えるのかワクワクしていた。因みにユオンはかつてに家から出てきて、いつの間にかついて来ていた。

「上手ではない」

「昔からそうだったの？」

食べ物を口にすることが出来ないユオンが、ここぞとばかりに口を開く。

『ああ、その通り。ゼロは友達も少なくて私がいつも話し相手になっていた。子供のころは今よりもっとひどかったぞ。それとゼロ、お前は誰が見ても下手だ』

「ゼロ、一切れあげようか？」

「いいのか」

ありがとう、とゼロはシェイルからステーキをもらう。どうやら二人の心にユオンの声は響かなかったようだ。

『おい！ 私の話しを聞け』

二人は笑顔で見つめ合っている。

『無視か？ 無視なのか、二人して。どうせ私は、召使いロボットだ』

やっと心にとどいたのか、ゼロが反応した。

「ユオンそれは間違っている」

『ゼロ！』

「お前は軍用犬だ」

ゼロの言葉が何度もユオンの頭の中で繰り返される。ユオンは項垂れ、返す言葉も浮かばない。

「かわいいそう」

その言葉にユオンはシェイルのもとに寄る。

「犬なのに吠えれないなんて。だから、ゼロが話し相手になったんだね」

急に震えだしたユオンをシェイルがやさしく撫でた。

第4章：一步前へ

教育センターに入ってから数ヶ月がたち、初めてとなるテストまで数週間となった。共和国軍では、実技演習に入る前にテストが行われる。このテストに合格すれば、戦闘機に乗ることが認められる。そしてその後、二度の実技テストの後やっと最終テストを受けることになる。ただし、テストは二回しか受けられず、二回失敗すると特別な場合を除いて一生軍人になることは無い。そのため、この時期になると完全消灯ギリギリまで候補生たちは教育センターに残る。

ゼロとシェイルも二人そろってテストに向け勉強している。二人がいる場所は自習室ではなく、いつものカフェである。人気があるわけでないので、自習室なみの静かさを持っている。

「ゼロ、この問題手伝ってくれる」

ゼロ、シェイルの端末に目を向けた。

以下の場合において最善策を考えなさい。目標解答時間5分。空間条件なし、右エンジンに被弾。被害A-3大破、メインパイプ大破、冷却水30%減少、出力50%低下。左エンジンは過冷却20%で通常運転。機体は、KW-AS804C演習機である。

「そうだな、俺なら緊急冷却でまずは右を抑える。落ち着いたら、6対4にするが」

そういつてゼロは、シュミレーションを言葉通りに実行した。すぐに結果が告げられる。

「予想される結果は、冷却水45%減少、右出力40%、左出力5%低下」

シェイルは満足とは言えない結果に首を捻る。

「やっぱり、緊急冷却は無駄遣いになるしどうしたらいいのかな」

「思い切って、左からもらったらどうだ」

「うん」。……そうだ。左をメインからサブに切り替えて」

どうやら解けたようなのでセロは自分の端末に視線を戻した。

二人が熱中して取り組んでいる中、ミングが二人の肩を叩く。

「どう？ 進んでる。あなたたちを見てみると、昔を思い出すわ。あの時は、話しかけられるだけで嫌気が差していたわ」

分かっているのなら、と二人は叫びたかったがいろいろと親切に

してもらっていたため、心の中で爆発させる。二人の心の叫びに驚き、ユオンが飛び上がった。

「あら。あなた、ユオンなの？」

ミングの目の前には、誰から見てもただの犬が寝そべっている。

「その服、似合っているわ」

シェイルからのすすめもあつて、ゼロはユオンに本物の犬のように毛を生やせ、吠えられるようにしていた。ユオンはあまり気に入っていないようだが、以前にも増して犬らしくなってからはいく、赤の他人からも声を掛けられるようになった。

ユオンがわざとらしく様々な犬種の声で吠え始めた。ゼロは不由しなようにと、世界中の犬の声を入れたのだ。ユオンはミングに悲しい顔を向け同情を求める。

「ユオン凄いわね。本物の犬みたい」

またもや期待していた言葉が得られず、ユオンは塞ぎ込んだ。

第4章：一步前へ？

「こんな話、しに来たんじゃなくて、お二人さん。最近、遊びに行ったりした？」

そんな暇はありません、とシェイル。こんな時期に本気ですか、とゼロ。ミングは、2枚のあるチケットを手渡す。チケットには、映画の上映時間や座席表、予告映像が入れ替わりながら常に流れている。

「いいのですか。手に入り難いもののなに」

「夫の帰りが遅れるみたいでね。代わりに行っておいで」

二人は遠慮したが、ミングの押しに負け、受け取らせてもらった。その後も話は止まらず、ようやく途切れたところでシェイルが、少し用事があると言って出て行った。ミングはシェイルの姿が見えなくなっただのを確かめると急にゼロの耳元へ寄った。

「シェイルとは、どこまでいったの？」

「どこまっで、何も進んでいません」

ミングが大声を上げ、立ち上がる。酷い耳鳴りが、ゼロを襲った。

「信じられない。どういいうつもり。早く物にしなさい」

噴火寸前の火山のような剣幕でミングは迫ってくる。

「ですがシェイルと会ってから、まだ数ヶ月しか」

「もうよ、もう！ 知らない人に盗られちゃうわよ」

ゼロが考えておきます、という火が付いたのかますます話に熱が入った。数十分後、お客さんが入って来たことでやっとゼロは開放された。

その後ゼロは再度、問題に取り掛かるが眠気襲われ頭が回らない。仕方なく、端末の電源を切り視界が狭まる中、ユオンの頭を撫でた。

「……ゼロ。ゼロ」とシェイルの声が優しく響いてきた。どうやら知らぬ間に寝てしまっていたようだ。目を開けると、外はだいぶ暗くなっていてカウンターでは、ミングがせっせと店仕舞いをしている。

「ゼロ。この後空いてる？ ご飯作るから私の家に寄っていかない」

「いいのか、ご馳走させてもらう」

センターから出た頃には、すっかり目が覚め、通りにあるスピーカーから夜を告げる音楽が耳を打つ。

「まもなく、完全消灯時間です。まだ、外にいる方は速やかに帰宅し、完全消灯時間後は外出をお控えください。皆様のご協力お願いいたします」とアナウンスも流れ始める。

二人と一匹は、やけに人気のない列車に乗り、静けさに包み込まれる街を眺める。

シェイルの自宅に着くと、すぐにシェイルは夕食を作り始めた。夕食を食べ終わる頃には、完全消灯時間となり、街から光が消える。

片付けを済ますと二人は端末に手を伸ばした。シェイルがウォーリングクを真つ暗な街の映像から南国の海に変え、部屋全体が青色に色づく。ユオンは二人を余所にソファアの上で丸くなって寝ている。テレビの電源は切られており、ウォーリングクからは音が出ないので、部屋は勉強には最適な環境であった。

問題を切りのいいところまで解いたゼロは、視線を端末から外す。映像の魚が動いた際に、壁を照らす青色が踊る。欠伸をして、ふと前を見るとシェイルがすでに脱落していた。シェイルはぐっすり寝ていて声を掛けてみたが目は開けられないことはない。そんなシェ

イルをそつと抱き上げ、寢室に向かった。

ベットにゆつくりと下ろし、シェイルの顔を隠す髪をはらう。普段恥ずかしくて見つめられない分、穴が開くほどまじまじとシェイルを見る。

エメラルド色の美しい瞳は閉じられているが、異性にまったく興味を持たなかったゼロをも惹きつける整った顔が目を離させない。自然とゼロはシェイルの頬を撫でていた。

いつまでも触り続けなくなる絹のような触り心地で、薄く開かれた口がゼロをいとも簡単に誘う。理性をなんとか保ちながらしつかりと目に焼き付けた。限界が訪れる前に、寢室を抜け出す。リビングに戻ったゼロはソファアをベット代わりに浅い眠りについた。

第4章：一步前へ？

試験当日、教育センターはいつもと変わらぬ朝を向かえた。ゼロとシェイルは教育センターのカフェで話している。二人は昨日、ミングから譲り受けた映画のチケットを無駄にせず、息抜きとして見に行っていた。

「あと2時間だよ。どうしよう、不安になってきた」

「大丈夫だ。自分を信じる」

シェイルは頷くが、不安な様子は変わらない。時間が近づき、二人は試験室に向かった。

予め指定された席に座り、教官が現れるのを今か今かと待つ。候補生がそろったところで、三人の教官が入ってきた。

ゼロは、後ろの方の席だったのではつきりとは分らないが、おそらくグヴェー教官とライマツト教官、ルミリオン教官であろう。

その内の一人が話し出す。グヴェーの声だ。

「今から、第一試験を始める。各試験時間は2時間。休憩時間は5分。昼食は二科目の試験後の30分で済ませる。以上。質問がある者はいないか？ それでは、くれぐれも不正が無いようにな」

机の画面に試験問題が映る。始めの合図と共に候補生たちは一斉に手を動かした。

候補生は仕切りで覆われ、内側からは外が見えないようになっていた。試験室全体がピリピリとした空気で包み込まれていた。

試験終了5分前になると、残り時間が解答欄の横に出され、終了と同時に画面が真っ暗になった。

息つく暇も無く、次の試験が始まる。計算問題が最も多いこの試験は、最大の山場であり、合否を左右する大事な試験だ。候補生は最後の最後めで取り組み、心身を削る。

急な坂道を登りきった後は、緩やかな下り坂が待っている。緩やかといっても、その分長い。ここからは、集中力との戦いなのである。最後までそれを保った者だけが生き残れるのだ。

全ての試験が終わる頃には、太陽の面影は無く日付も変わりつつあった。完全消灯時間をとくに過ぎているので、この日はセンターで夜を明かすことになる。

途轍もなく長い一日が終わり、ペア毎に振り分けられた部屋でゼロとシェイルは食事をとっていた。センター内のホテルは思っていたよりも広く豪華だ。部屋は5つもあり、設備は全て最新のものの。全面ウォールリンクに体感型テレビ、世界中の料理を網羅する全自動調理器までよりどりみどりである。

二人の間に会話は無く、お腹を満たすとすぐにベットに身を委ねると、泥のように眠った。

ユーバ特有の強い朝日がビルを輝かす。ウォールリンクが起動しゼロの顔を照らした。端末が朝の訪れを知らせるが、ゼロは微動だにしない。

それからしばらくして目が覚めたゼロは、動くのもままならなかった。ベッドからテーブルの上の端末に手を伸ばす。伸ばした手を振ったり、パタパタしてみても一向にとどかない。

天井で鳥たちが音も無く飛び去った。仕方なく、重い腰を上げベツトから抜け出した。ゼロは手櫛で髪を直しながら端末の電源を入れ、服を着替える。

「メールを再生してくれ」

早朝には似合わない無機質な音声で端末が応える。

「メールは一件です。軍教育センターからです。再生します。試験お疲れ様でした。試験結果は合格とさせていただきます。詳しい結果はセンター本部までお越しく下さい。以上です」

「テレビをつけてくれ」

三次元の映像が小さなポットから現れた。ニュースキャスターの声は確かに耳に入ってきたが、頭にはぜんぜん入らない。部屋の管理システムがしゃべりだした。

「只今11時30分です。朝食はいかがなさいますか」

「何でもいい。シェイルは起きているか」

「ハイ。30分程前に」

ゼロがリビングに入ると、シェイルが朝ご飯をテーブルに並べていた。

「あっゼロ、おはよう」

シェイルが振り向き眠そうに目をこすっているゼロに声を掛ける。

「おはよう」

シェイルが欠伸をする一つし、椅子に座った。シェイルを見つめていたゼロもつられて欠伸をする。

「試験どうだった？」

「合格したよ。シェイルは？」

私も、と返ってきた。二人は喜ぶべきであったが、今はまだそんな気力さえ無い。昼前にはホテルを出て自宅に戻った。

玄関のドアを開けるとユオンが尻尾を振って歓迎してくれた。

『随分、疲れているようだな。ゼロ、うまくいったのか?』

上着を脱ぎ、ソファーに腰掛ける。

「ああ。合格したよ」

「それは良かった。頑張った甲斐があったな。だが、こんなところで寝るなよ」

ゼロはゆっくりと立ち上がった。ユオンは様子を見について行く。相当疲れていたのだろう。ゼロは倒れこむようにベットに入った。深々と寝入っているゼロの顔は、子供のようなあどけなさを残している。

夕食前に目覚め、大分軽くなった体を起こす。

『やっと起きたか』

ユオンがソファーに座りテレビを見ている。ゼロは何も言わず静かに座った。

『この程度でうろたえる様子じゃ、先が思いやられるな』

ユオンがゼロのひざの上に片足を置く。

「……これで。これでまた奴に一步近づいた」

それを聞いたユオンが顔を下げる。

『ふつむ。あまり熱を入れるなよゼロ。道を誤るぞ』

ゼロは聞いているのかいないのか、ただ前だけを見つめていた。

第5章：二人並んで

試験から一週間後、合格者が軍教育センターに集められた。

初め400人近くいた候補生たちが、今では100人足らず。短距離走が出来たくらい広かった講義室も、一番後ろの席からグヴェーの鋭い眼光がはつきりと見えるほどの狭さになった。

ゼロは、なかなか現れない教官に憤りをおぼえ、辺りを見回す。まず、一際目立つ大柄の男の姿が目に入った。ディオネであろうその男の横にはユミルが座っていた。二人とは離れているところに座っていたので、声は掛けられそうにない。

隣にいるシェイルは、昨日買い換えた最新モデルの携帯端末に夢中だ。真新しい機能を見つける度に輝いた表情でゼロを呼ぶ。最近になってゼロやシェイルが使っている腕に巻くタイプの携帯端末は体内内蔵型に圧倒されているため、滅多に新型が出ない。

ゼロが買い換えようかと考えているところでやっと教官がやって来た。かなり遅れているというのに何食わぬ顔で喋り出す。

「久しぶりだな。みな元気で何よりだ」

講義室の静けさが増した。どこかで聞き覚えのある声だったが、ゼロは誰なのか思い出せなかった。しかし、服装からして位の高い者であることは分かる。

「君たちとは入隊テスト以来、私のことを忘れてしまったのではないか？」

その教官はうんともすんとも言わない候補生たちを苦笑で迎える。

「仕方が無い。簡単な自己紹介でもしよう。私は、ここの総合責任者ナビク・リギュラインだ。社長のような者だぞ。ハッハッハ、これは来年のテストに出したら合格者が居なくなってしまういそうだな」

講義室がにこやかな笑いに包まれる。

「さて、今日は時間もあることだし、長話をさせてもらおう」

突然ドアが開いて慌しく教官が入って来た。そして敬礼もなしに口を開く。

「緊急招集がかかりました。同行願います」

リギュラインは頭に手を当てる。

「これでは、いつまでたっても彼らは点が取れないではないか」

「はい？」

候補生は黙って事の成り行きを見届ける。

「仕方がない。話はまた今度にしよう」

二人が出て行ったドアから忙しく行き交う人を垣間見た。候補生がざわつき始めたところでルミリオンが現れる。

「全員いるな。今日から実技演習に入る。演習はグループ単位で行う。早速だが顔合わせといこう。グループはすでにこちらで決めている。不満は聞かないぞ」

端末には3 - Aと表示されていた。

「グループの中でA B C D、と分かれているだろう。それは成績順にしたものだ。Aがグループリーダー、B、C、Dには役目は無い。リーダーを中心に仲良くな」

ゼロは振り返り同じグループの顔を覚える。残念ながら、デイオネたちとは別のグループのようだ。ふと、端末を見ると担当の教官

がグヴェーだった。

訓練が始まって早数ヶ月、候補生たちは初歩的な課題を難くこなし、着実に力をつけてきた。

新たな訓練のために連れてこられたのは人、一人が優に収まる大きさの真っ白なカプセルが並べられた訓練施設であった。グヴェーが口を開く。

「今日から、アエネアスを用いた訓練を実施する。プログラムに従ってエンジンの方向転換からだ。さあ、入れ」

アエネアスがゆっくりと傾斜し、口を大きく開けた。ゼロはアエネアスに乗り込む。

「よし、訓練開始」

目を瞑り頭の中を真っ白にする。目を瞑っているのに、鮮明な風景が見えてきた。見慣れない滑走路に、一機の戦闘機が地に足を付けている。

『どうだ？ 見えているか。見えている者は返事をしろ』

グヴェーの声が頭に入ってきた。すかさず、ゼロは答える。

『A1了解』

ゼロに続いて他の候補生も返事をしていく。

『うん？ どうしたD2。……聞こえないのか。初めからやり直しだな。他の者は訓練を続ける』

候補生は訓練マニュアルに従って戦闘機を操縦する。しっかりと思考できていれば、目の前にある戦闘機に動きがあるはずだ。

ゼロの思考にぴったりとあわせて、エンジンが上下に可動し、ノズルが上下左右に動く。

『大まかな動きは出来るようだな。細かな動きもしっかりやれ』

ゼロはただ動かすのではなく、二つあるエンジンを同じ角度にしたり、非対称な動きをさせる。自由自在に操れるようになると次々に課題をこなしていった。

『さすが、最優秀候補生。こんな訓練お手の物か？』

グヴェーのゼロに対する評価に他の候補生が負けじと力を入れて取り組む。

『よし、進めるぞ』

戦闘機が消え、代わりに高度計、方角計などが浮び上がった。

『今度はコックピット視点で訓練を行う。先程のように動きを確認できないからな』

ゼロの前に、青色のサークルが現れる。自分の思考にかかわらず、それは迫ってくる。おそらく、速さが固定されているのだろう。一つ目のサークルを潜り抜けると次々にサークルが表示され、青いトンネルを形成していく。

トンネルは蛇のように曲がりくねっていて激しい動きを求める。ゼロは一度もサークルに触れることなく前へ進んだ。進むにつれサークルは縮まり、スピードが上がる。初めは何ともなかった候補生たちが、次第にグヴェーの罵声を浴びていく。

今日の訓練の最後に操作が簡略化された垂直離着陸が行われたが、成功したものはゼロとシェイルを含む三人だけであった。

それから2カ月、飛行訓練の基礎を築くと変わってパワードスーツの訓練が始まった。訓練は本物のパワードスーツで行われ、パワ

ードスーツを着込んだ候補生たちが、グヴェーを待ち整列している。少し遅れてやってきたグヴェーは、会議で遅れたというと候補生を訓練施設へ移動させた。

「まだ、電源は入れるなよ。そのまま移動しろ」

パワードスーツ自体は歩けなくなる程の重さではないので苦にはならない。しかし、隣で歩くシェイルはどこか辛そうだ。ゼロは教官の目を気にしながら、シェイルを呼んだ。

「シェイル、どうした」

えっ、とシェイルはきょとんとした顔を上げる。

「……無理するなよ」

ゼロは返事を聞くことなく、シェイルから離れ少し先を歩く。シェイルは、深い溜め息をつきゼロの後を追った。

戦闘艦がすっぽり入りそうな巨大な施設に着くと、グヴェーからフルフェイスマスクの装着とパワードスーツ起動の指示が出た。アエナスと同様に外の様子が頭に入ってくる。

「電源を入れた者からチェックを開始。済んだら報告しろ」

パワードスーツのシステムによるチェックが終わると、軽く体を動かし、きちんと同調しているか確かめる。電子機器が正常に作動しているか見て、グヴェーに報告した。全員のチェックが完了すると、グヴェーが訓練について話し出す。

「お前たちの目の先にある、障害物をペアで乗り越えることが今回の訓練だ」

ゼロの目には、巨大な施設に見合った大きなぶつたが映る。

「よし。ゼロ、シエイル始めるぞ。スタートラインに立て。もし後からスタートした者に追い抜かれれば、……分かるだろう？」

グヴェーの合図で二人は全力で走り出した。ゼロが先行し、シエイルは足手まといにならないように、と付いて行く。

訓練開始から2時間以上たったが、パワードスーツのおかげで一切疲れは無い。この間、二人は一言も交わさず、顔さえ合わせていない。会話が禁止されているわけではなかったが、シエイルから何かしら負のオーラが感じられ、話し掛けれなかった。

そして、それはゼロがシエイルに手を差し伸べる度にそれをより強く感じる。訓練が終わっても挨拶を交わすだけでしかなかった。

ゼロは眠る前にもう一回シェイルのことを思った。シェイルの様子がおかしかったのは今日だけではない。もつと言えば、実技訓練が始まってから気掛かりなことが多くなっていた。原因となるようなことがないか思い起こすが思い当たることはない。本人に直接聞くしかないと考え、明日に備えて眠りについた。

翌日ゼロは、訓練の合間に話を切り出そうとするが、気が付けばすでに夕方。多くの候補生が帰路に付く中、ゼロは元氣のないシェイルに心を痛めた。

「シェイル。何かあったのか？」

シェイルが笑顔で答える。

「何が？」

「いや、最近辛そうな顔をよく見るから」

「……気のせいだよ」

ゼロは歩みを止め、シェイルの腕を握った。

「シェイル！」

ゼロの強い呼びかけに心が揺れた。シェイルは溜め込めていた胸の内を話す。

「私は、……私は、ゼロと一緒に歩きたい。それなのに、後から付いて行くことしかできない」

心のどこかで感じていたシェイルの気持ちだが、現実の言葉となった。

「シェイルそうじゃない。俺は、シェイルがいるからこそ前を歩ける。前に進めるんだ。里親にさえ心を開けなかった俺は、シェイルに出会って変わった。目標もなしにただただ歩き回っていた俺に、一筋の道を作ってくれた」

シェイルはゼロの目を食い入るように見つめる。

「目には見えなくても、シェイルは俺の手を引っ張っていてくれる。だからそんなふうに思うな。シェイルは俺といつも一緒に歩いている」

シェイルは顔を染めていった。

「ありがとう」

「こちらこそ。もう大丈夫だな」

シェイルは大きく頷いた。

「でも、ゼロもクサイ台詞言うことあるんだね」

ゼロは恥ずかしいのか顔を伏せる。

第6章：二つの壁

訓練機の証である青と白で彩られた戦闘機。どこまでも澄んだ青い空が候補生たちの緊張を引き立たせる。

今日は、実技テストが行われる日。教官はグヴェーだけでなく、彼の横には名も知らない二人が立っていた。グヴェーは時間を確かめ、事を進める。

「時間だ。候補生は戦闘機に乗り込め」

熱い熱気が戦闘機に足を踏み入れる候補生を歓迎する。

「それでは、グループ3の第二試験を開始する。試験内容を再度確認する。試験はアルファベット順で行い、まずAスポットまで移動。停止した後、再起動を行え。起動後、垂直離陸。ポイント1に移動し、空中、海中、宇宙で飛行試験。終了したら再びAスポットに着陸。以上。よし、Aペア、試験開始」

ゼロとシェイルが乗る戦闘機が編隊から離れ、滑走路に向かった。停止ラインまで移動した後、エンジンを切りシステムを終了させる。ゼロはゆっくりと深呼吸してから再起動に踏み切った。

『エンジンノーマルスタート』

エンジンブレードがゆっくり、大きな唸り声を上げ回り始める。
大地が揺らめき、強い風が吹き抜けた。

『出力20%上昇、エネルギー供給開始』

計器類が目覚ました。ここからは、ゼロは機体をシエイルは電子機器系統に分かれて入念にチェックする。

『エンジン、ノズル共に正常に可動。冷却システム異常なし』

『レーダー起動。高度、方位、速度表示確認』

ブレードの回転速度が上がり、エンジンの轟音が消えた。

『出力50%上昇。エンジン始動完了。オートチェックオールグリーン』

『セーフティロック確認オートチェックオールグリーン』

再起動が完了し、ゼロは離陸にかかる。エンジンが直角に動き、ノズルが真下に向く。機首下のスラスターが装甲を開き顔を覗かせ

た。

巧みな出力調整の元、重厚な戦闘機が雲のように浮かび上がった。高度計の値が次々に変わる。そして高度計が赤色から、緑色になった。瞬時に降着装置が格納される。

『ギアアップ確認。シェイル』

『ええ。始めましょう』

スラスターを止め、エンジンを元の位置に戻す。ポイント1に移動して飛行試験を始めた。スクリーンには訓練の時と同じようにサークルが表示されている。

ノズルを目一杯絞り、その中に飛び込んだ。直線が続き速度が上がっていく。ゼロは出力を少しも緩めることなく突き進んだ。

大気圏内最高速度に手が届いたその瞬間、目先のサークルが忽然と消えた。ゼロはすぐに行動を起こす。

エンジンが体を起こす様に反転し、進行方向を向く。スラスターもブレーキとして尽力する。機首を上げ、攻め入る風を体全体で受けた。強靱な翼が軋み、心成しか叫び声が聞こえた。それでも仰向けになるまで上げ続けた。

その時、再びサークルが目に入る。エンジンを定位置にし、直角を超えた急カーブを曲がりきった。高ぶった感情と機体を落ち着かせ、先へと進む。緩やかなカーブは翼で風の力を借りて、機体を操る。急なカーブは、ノズルの助けをもってして、なるべくエンジンを可動させずに曲がりきる。

やっと試験の終了を表す赤いサークルを潜り、何とか一度のミスも無く、空での試験を終えた。次に待ち構えるのは、海中試験である。

『海中進入角度適正。進入速度まで減速』

『システム変更完了』

失速ギリギリの速度で海面に突っ込む。海の中は、抵抗が大きく翼が邪魔になる。加速性能は格段に下がり、方向転換にも時間差を生じる。アクロバットな動きを求めてきた道標にも疲れが見えた。ゼロは慎重に海中試験をこなした。最後の試験に臨むために空に舞い戻る。海水で濡れた機体がきらきらと輝く。海に別れを告げ真っ直ぐ、天を目指して突き進んだ。

『大気圏離脱開始。エンジン適正出力で維持』

重力から逃れる間、シエイルは他の準備にかかる。眼下に広がる建築物が小さくなってゆく。あっという間に、全てを飲み込む暗い宇宙に翼を広げた。淡い光を放つ星たちが二人を見守る。

慣性飛行で回っていると恒星の強い光の先にサークルが顔を見せてた。サークルが生み出した道は、難解な迷路のように捻くれている。あらゆる妨げのない宇宙は、自由に動けるが、機体制御が難しい。そのことを証明するかのように絶えずスラスタが火を噴き、エンジンが上下に激しく踊る。

訓練以上の反応の良さにシェイルは改めてゼロの凄さを感じた。
目まぐるしく、あらゆる計りが変化しシェイルは異常が無いか目を
光らせる。

飛行試験は何事もなく無事に終わり、帰還に向けて翻した。午後
からのパワードスーツの使用試験までにはまだ時間があつたため二
人はゼロの自宅に戻ることにした。この時間帯、教育センター内の
人道りは少ない。人とすれ違うことが無いので、妙な緊張をしなく
てよかったし、何より試験後で歩きやすかった。

「よう。ゼロ！」

声と共に急に伸び掛かれ、ゼロはよろめく。

「うう。早くどいてくれ」

ディオネがクツクツと、笑いゼロに寄りかかった。

「俺らも今、終わったところだ。飯でも食いにいかねえか？」

「奢ってくれるのならいいが」

両手を上げ、困った表情を見せる。

「冗談だろ。奢るほどの金なんて手元にねえよ」

「何かやらかしたな？」

ユミルがディオネをゼロから引き剥がす。

「はいはい。一銭も無いですよ。ディオネさん。……シェイルも聞いてよ。訓練でね、戦闘機を施設に思いっきりぶつけて、その請求で収入がパア。始末書を全部私に任せて、張本人はどこか遊びに行ったきり帰ってこない。どういっつもりなのかしら」

「いや、それほどでも」

有無を言わずユミルは拳を浴びせた。ディオネがその場で蹲る。腹を抱えながら、しぶしぶ歩くディオネを連れて食堂の赴いた。

「ところでゼロ、試験の相手知ってるか？」

「お前だ」

「……マジかよ！　つうか、何で知ってる」

「はあ？　もしかしてあなた見てないの？」

二人は喧嘩が好きなのだろう。一度始まった喧嘩は収まることを知らず、高まる一方だ。とばかりを食らう前に逃げ出そうとゼロとシェイルは休むことなく食を進める。

暖かい料理が冷めてしまっても繰り広げられる熱い戦いは終わらずに続いた。

第6章：二つの壁？

パワードスーツの試験は非武装の格闘戦。2対2で行われ、合否は勝敗に左右されない。勝敗よりもペアの連係が評価される。

日が昇りきり、パワードスーツの試験時間が迫った。試験会場であるアリーナの一角に候補生たちは集められた。各班の教官が指揮を執る。

「それでは、今回の試験について説明を行う。試験は30分間の試合形式。事前に知らせた相手と戦ってもらう。試合は2対2で非武装状態。ダメージレベル3で強制終了となる。説明は以上。何か質問はないか？ それでは、五試合目までの出場者はパワードスーツを装着し待機」

ゼロは三試合目だったので、余裕をもってパワードスーツを着に更衣室に入った。準備が終わり、出番が回ってくるまでの間、試合を観戦する。

30分では、決着が着くわけがなく、どれも接戦したものばかりであった。見ていてもつまらないものであったが、試験終了までアリーナから出ることは禁止されている。ゼロは頬杖をつき、ぼうつとしていた。それでも時間は刻々と過ぎて行き、ゼロたちの出番が回ってくる。

教官に呼ばれ、ゼロとシェイルはアリーナの中に入った。ドーム型のアリーナには、黒で身を包んだゼロたち四人がさびしく佇んでいる。

「三試合目を始める。両者構え」

異様な静けさが辺りを包み込む。始まりまでの一分一秒が永遠のように感じられた。

「始め！」

始まりの合図と共に、ゼロは全速力でディオネに突っ込む。ディオネは飛び上がりそれをかわす。ゼロは火花を散らしながら体を止めた。

すぐに両足に力を込め、ディオネに迫る。ディオネは上がってくるゼロに蹴りかかった。ゼロは瞬時に交わり、スラスターで勢いづけた回し蹴りを華麗に決めた。続けざまに空中で大きくバランスを崩したディオネに追い討ちをかける。

ディオネは地面に強く叩きつけられた。次の一手から逃れるために、顔を上げるまもなく横に飛び退く。が、そこにはシェイルがいた。動く間もなく、拳が降りかかる。倒れ込む前に今度はゼロは右ストレートが顔面に入った。慌てて、ユミルが二人の間に割って入り、ディオネを逃がす。

気を取り直し、今度はディオネから攻撃を仕掛けた。隙が生まれないように、ユミルと位置を常に確認しあう。ディオネは、ゼロとの距離を詰め寄るが、なかなか縮まらない。気付けば、ゼロの向かう先は明らかにシェイルの元。ゼロはなかなか決着の付かないこの戦いを混戦に持ち込むつもりであろう。ディオネはそう察し、ユミルに遠ざかるように言った。

素早くユミルがシェイルから離れる。しかし振り返ってもシェイルは後についてこない。ディオネの策略は間違っていた。ディオネは自ら2対1の状態にしたのだ。下がる前にゼロとシェイルが迫る。ユミルが助けに向かうも間に合う訳も無く、ディオネは圧倒的に不利な状態に置かれた。

ゼロとシェイルの途絶えることのない攻撃に身を守ることさえできない。ゼロの戒心の一撃で吹き飛ばされたことで、やっと開放された。ユミルが駆け寄る。

『ディオネ、大丈夫？』

ディオネはしぶしぶ体を起こす。ゼロとシェイルに動きは見られない。残り時間は5分を切ったところ。少しでも教官たちに良いところを見せなければならぬ。だが、すでに時間もなければ、気力もまったく無かった。

難攻不落の二重壁は未だに、二人の前で佇んでいる。1対1に持ち込むことが出来たとしても、返り討ちにあうだけ。事前の身体テスト結果では、ゼロとディオネの力差は歴然であるが、シェイルとユミルを比べるとユミルが上回っていたはず。そのことを思い出し二人まとめてか掛ければ、ゼロとシェイルに勝てるتماでは言わないが、大きな打撃を与えられるかもしれない。ディオネは短い言葉で作戦を伝えた。

ユミルの反応はとても悪かったが何もしないわけにはいかなかった。二人は呼吸を合わせ、動きを合わせゼロたちに挑みかかる。

「だあくそつ。駄目だった」

更衣室で大きく背伸びしたディオネが声を漏らす。丸々30分間戦闘を続けたもののディオネに見せ場は一度も訪れることはなかった。パワードスーツを脱ぎ終えたゼロがディオネの隣で腰を下ろす。

「お疲れ様」

「うるせー。こんなにもうまくいかないとは」

ぼそぼそと嘆くディオネを残して、ゼロは更衣室から出て行つた。続けられている試験を横目にシエイルを待つ。夕時の穏やかな時間。姿を表さないシエイルに待ちくたびれて、ゼロは重くなった瞼を閉じることにした。

「……ぜ、……ゼロ。起きる時間だ」

どこか懐かしい男性の声がする。何度も呼ばれるので、ベットから体を起こし目を開く。意識がはつきりする前に声の主から頭をガシガシ撫でられた。

「おはよう」

ゼロは男の顔も見ずにただ頷いた。再び眠りに付こうと体の力を抜くが、寝そべる前に男に抱きかかえられた。

そのまま男に連れていかれ、クッションが重ねられた椅子に座られる。湯気がたつ朝食を眺めていると、早く食べると急かされた。扱いづらい長い箸を片手に、食器をそばに寄せる。食べ進めるが一向に量が減らない朝食と格闘しているとさっきの男が様子を見に来た。男はしゃがんでゼロに視線を合わせる。

「昨日から、書類上でも家族の一員になったわけだ。もつとこう、子供らしく振舞え。ん？ 違うか。……まあいい、飯はいいから着替える」

ゼロは、テーブルに箸を置く。男は車で待つてると、言い残し部屋から出た行った。長く待たせる訳にはいかないので素早く着替える。しかし、一分も立たない内に声が掛かった。今度は女性の声だ。

「ゼロ、……ゼロ。起きて」

先程とは打って変わって、たくさん話し声も耳に入ってくる。目を開けると、着替えを済ませたシェイルがいた。

「待たせてごめんなさい」

困った顔をしたシェイルにゼロは首を振る。

「いや、気にするな。夢を見ていたんだな」

「えっ、何？」

アリーナへの喚声でお互いに話しが良く聞き取れない。ゼロはシェイルの手を取る。

「子供の頃の夢を見た」

歩き出したゼロの表情からは、気分は窺えない。

「ねえ、ゼロ。夢って悪い夢じゃないよね」

シェイルがどこか心配そうな顔で見つめてきた。

「親父に起こされて、学校に行くまでの夢。もう随分会ってないから、懐かしかった」

ふと窓を見れば、沈み始めた日が空をオレンジ色に染めている。

「なら良かった。早く帰ろ、ユオンが待ちくたびれちゃう」

シエイルが歩みを速めるので、ゼロは手を引かれ、思いに更けかけていた思考が現実へと戻された。

第7章：傷ついた心は

無事に合格した候補生を歓迎したのは、以前にも増して厳しくなった訓練であった。

走り難い荒れた大地に、体の水分を奪う灼熱が降り注ぐ。風は頬をなでるだけで、流れる汗は乾くことなく滴り落ちてゆく。幅の広い道に木々の陰は現れず、日の光からはどうやっても逃れられない。

「走れ、走れ。もつとペースを上げる！」

教官が絶えず叫び声を上げ、候補生たちを極限へと追い詰める。全員パワードスーツを装着し、それぞれ武装を身につけて走っていた。なぜか候補生だけは、フルフェイスを外し武器と一緒に身につけている。ゼロとディオネはお互いを励まし合いながら横並びになって走っていた。

「駄目だ、もうだめ。ゼロ、俺死にそう」

「騒ぐな、また叩かれるぞ」

そう言ったゼロにも生き生きとした走りは見られない。刻まれる足音は皆バラバラで、舞う土煙はカラカラになった咽喉を傷つけていく。

「本当、馬鹿げているよな。パワードスーツを着ていながら、使

うなだぞ。それでいて、自分たちはパワードスーツで走りやがって」

教官は決して、変わる事のない力強い走りで後ろから付いている。機密性の高いパワードスーツは、体内からあふれ出る熱を保持し続け逃がさない。

「せめて、温度調節ぐらいはいいだろ。このままじゃ溶けちまう」

聞こえなかったのか、ゼロは何も言わない。おい、とディオネがゼロの胸を叩く。

「何だ？ 黙って走れ」

「おいおい、今は訓練中にグチれるチャンスなんだぜ」

そうこうしているうちに、教官がスピードを上げて迫ってきた。

二人は口を噤み、教官が通り過ぎるのを待つ。

「遅いんだよ。もっと走れ」

そうやって、先頭まで櫓を飛ばし終わると、また最後尾に戻っていく。ディオネは大げさに振り返り、教官が戻ったことを見るや否や、しゃべりだした。

「なんやかんや言ってよ。ゼロ、お前は中量の武装だ。俺よりも楽だろう」

ゼロは鋭い目でにらみ返す。

「その重苦しいものはお前自身で選んだものだろ。わざわざ一番

重量のある武器にするのが悪いんだ。だがな、それでもずっと腕にへばりつかれて走るよりはましだ」

「へへん。お前も立派に文句言ってんじゃん」

夜明け前から始まった身を削るこのマラソン。日中になり、気温はますます上がりである。気晴らしに仰げば、たちまち日差しが体中を支配する。乾いた大地が熱風にのせて、しきりに水がほしいと嘆くが、与えられる水分は彼らから流れ出る汗しかない。

次第に真っ直ぐ走れなくなる者が増えてきた。ゼロも自分が教育センターのどこを走っているのか分からなくなっていた。すぐ隣には、減らず口で有名なディオネがいるはずなのだが、気配が感じられない。さすがに心配になり、大丈夫か、と声を掛けてみたが、首を振られるだけだった。

歩みをやめるものが多く出てきたところでやっと休めの指示が出た。候補生たちは、迷わず地面に向かい崩れこむ。ゼロは肩で息をしながら、仰向けになる。日差しをさえぎる黒く厚い雲がこの時ばかりはとても優しく見えた。

呼吸が整い、はつきりと物事を考えられるまでに意識が戻ってきた。いまだに意識が朦朧としている候補生がいる中、ゼロは他人の心配し始めた。それは、お世辞でも体力があるとは言えないシェイルのことだった。

この訓練は二つのグループに分けて行われている。後の方であるシェイルは、今頃走り始めたところであろう。そんなゼロの不安を遮るかのように、教官が大声を上げる。

「もう、充分休んだだろう。この調子でいけば日が沈む前に走り終わる。ほら、立て走るぞ」

候補生たちは顔を見合わせ、空を見上げる。日は昇りきつてもいない。教官の言葉を素直に信じ、走り出す者がいる中ディオネは地面に這いつくばったままだ。ゼロは教官に怒鳴られることのないようディオネを引っ張り上げた。

「最後まで一緒に走るといったのはお前だろう」

ディオネは首を振る。しかしそれは、否定の意味ではなかった。

「仕方ないな。そこまで一緒に走りたいなら俺も頑張るか」

ゼロは耳を傾けることなく、全力でその場を去った。一人残されたディオネはぼやく。

「まったく、ゼロは照れ屋さんだな。でも、まさかあいつに背中を押されるとは」

前触れもなく、ディオネの後頭部に激痛がはしった。

「ナニが照れ屋だ。いいから走れ。それともお前だけ夜明けまで走るか？」

教官の存在をすっかり忘れていた自分を恨めしく思った。ディオネは頭を抑えながら、しぶしぶと姿が見えなくなってしまったゼロを追いかけるべく足を動かした。

翌日、候補生たちは昨日の疲れを癒せぬまま、戦闘機の格納庫に集められた。昨日の訓練は、体力強化という名目だけで、あのラン

ニングだったので今日も想像を超える厳しい訓練が待っているだろうと皆、不安で一杯だった。

その気持ちを知ってか知らずか予定より早く教官はやってきた。

「昨日はご苦労だったな。それでは、今日の訓練について説明を行う。」

教官の足元からブリーフィングのためのスクリーンが立ち上がる。

「今回の訓練はカリキュラムどおりのものだ。昨日のような突拍子もない訓練だから安心していいぞ」

あの時とは違う教官だからといってここまで違うのかとゼロは感心した。見るからに新米の教官のようだ。

「訓練内容は、いたって簡単。グループ内での模擬戦闘そのものだ。訓練が2日間にわたっているのは、例年時間がかかるものだからな。この訓練の主な目的は、チームの特徴を知り、後に行われる他国の候補生との模擬戦において有利に戦ってもらうためだ。有意義な演習になるように心得ておくように。分かっていると思うが、先の試験で不合格者が出ているため再編成されたグループもある。これを機に信頼関係も築いておけ」

幸いなことに、ゼロのグループは不合格者による変動はなかった。

「今回の模擬戦闘では多くの制約がある。武装は、最低出力まで低下させたエネルギー機銃。演習用ミサイルの二種類だ。戦闘区域は第1〜4演習場内。万が一、戦闘区域外へ出た場合はこちらに操縦が移され、強制帰還の措置をとる。以上で説明は終わりだ。質問があるものはいるか？ それでは解散。グループ1は戦闘準備に入

れ。 30分後に開始する」

ゼロは受信した資料をおおまかに読み取った。演習予定開始時刻まで時間は十分にある。ゼロは強張った体を気にしながら、シエイルと機体整備に足を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6631h/>

開拓者～神の力を持つ者たち～

2011年11月20日04時00分発行